主日の福音 2024/1/1(No.1274)

神の母聖マリア（ルカ 2:16-21）

マリアは私たちに救い主を指し示す（2011 年説教参照）

新年明けましておめでとうございます。日本の教会にとって、１月１日はほかの国とは違った重みがあります。この大切な日に、教会は神の母聖マリアをお祝いいたします。日本人にとっての１年の始まりを、聖マリアを祝うことで迎えることに、意味を見つけたいと思います。

「一年の計は元旦にあり」と言われます。そこでお勧めしたいことが、「カトリック信者として、この一年をどのように過ごすか考える」ということです。わたしは、神の母聖マリアに、この一年をどのように歩むか、模範を仰いだらよいと思います。

今日の朗読箇所から、模範を見つけたいのですが、２つ示したいと思います。１つは、間違いなくここです。「マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。」（2・19）マリアは出来事をよく観察し、その意味を慎重に思い巡らす人でした。慌てて判断を誤るというのでもなく、判断を遅らせて大事に至るのでもなく、慎重に判断することのできる人でした。

私たちはなかなか、慎重に物事を見極めて判断することができません。感情的にすぐに反応してしまったり、後回しにして損失を被ったりします。そういう目に遭ってさえも、なかなか反省が身につきません。

そこで、慎重な判断が求められるときに、気持ちの上で次のように考えたらどうでしょうか。「今、大事な判断が求められている。マリアさまと一緒に考えることにしよう。」こういう思いで、出来事を思い巡らすならば、どんなに落ち着かない人も慌てる人も、慎重な判断が身に付いていくのではないでしょうか。

「この出来事をどう受け止めたらよいのか。マリアさまと一緒に考えてみよう。」このちょっとした取り組みで、わたしの判断は格段に慎重なものになるのではないでしょうか。即断即決する人でも、そこに至る前の段階で慎重に考える時間があるはずです。マリアさまと一緒に考えをまとめることをお勧めします。

もう１つ、マリアから仰ぎたい模範を見つけましょう。これは、今日の福音朗読を読みながら考えたことです。羊飼いたちが、幼子を訪ね当てた場面に表れています。「そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。」（2・16）

羊飼いたちは、飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子だけを見つけたのではありません。「マリアとヨセフ、また乳飲み子を」と書いてあります。当たり前のことですが、天使が「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。」（2・11）と言った時、羊飼いはその救い主のことを、幼子に直接尋ねるわけにはいかないのです。

当然、マリア、またはヨセフに尋ねたはずです。わたしは、この名前の書き方、母の名前を先に出し、そのあとにヨセフの名前を出しているのは、やはり先に、母マリアを羊飼いたちは見つけたのではないかと

思うのです。

そして母となったマリアに、「この子が、お生まれになった救い主ですか？」と、尋ねたのだと思います。母マリアは、ヨセフと一緒にいて、生まれたばかりの乳飲み子を示したのではないでしょうか。

マリアが、救い主を指し示すということには意味があるわけです。マリアは、神の子ではありませんが、真っ先に、神の子・救い主はこちらですと、指し示すことのできる方なのではないでしょうか。

つまりマリアは、私たちが道に迷ったり、救い主に心が向かっているか確信がなくて力を落とすときに、「あなたを救う方はこの方です。あなたはこの方に、何かを願うべきです」と、はっきり指し示してくれる方だということです。

私たちが、日々イエスに向かって歩みを進めなければならないことは百も承知です。ただ、それを自分の力だけでできるかというと、そんなに強いわけではありません。そんなときに、「あなたはこの道で、この方法で、イエスにまっすぐに向かうべきです」そんな導きをすべての人にくださるのが、マリアさまなのではないでしょうか。

そう考えて１年を見渡すと、５月と10月に、私たちはマリアにロザリオの祈りをささげる月が回って来ることに思い当たるでしょう。あるいは、８月15日には聖母被昇天の祭日が回ってきます。そう考えると、１年の節目節目に、私たちは聖母マリアに支えをいただいて１年を過ごしているのではないでしょうか。

神の母聖マリアは、神の子を宿し、人類の救いに協力したほめたたえられるべき方です。この方は、神の母でありながら、私たちから遠い存在ではありません。むしろ、身分も何もない羊飼いに救い主を指し示したことでもわかるように、私たちにより近いお方なのです。

この一年を、実り豊かなものにしましょう。そのために、常に救い主を指し示してくださる神の母聖マリアに、取り次ぎを願いましょう。道を間違えそうになる時、道を見失いそうになる時、神の母聖マリアが、「救い主に向かう道はこちらです」と指し示してくださいます。今日のミサで、マリアの取り次ぎを信頼していますと、マリアに呼びかけることにいたしましょう。

主の公現(マタイ 2:1-12)

主日の福音 2024/1/7(No.1275)

主の公現（マタイ 2:1-12）

あなたが受け取った片道切符はドラマに満ちている

主の公現を迎えました。イエス様が東方の学者たちの礼拝を受けたことで、世界中に救い主が示されたことを象徴的に表しています。福江教会でも星を見た学者たちがジワジワ近づいてきていました。主人公はイエス様なのですが、今日は特別に脇役が光っていますね。

１月 30 日の司祭団マラソンが近づいてきました。私もトレーニングに励んでいますが、勝ち負けはとてもできないです。練習の感触だと、堂崎教会から福江教会まで１時間 15 分くらいでしょうか。１時間過ぎたあたりで聖マリアの園とか聖マリア病院とかを通過していたら上出来だと思います。誰が誰か、分からないだろうと思いますので、私はこの、カープファンお似合いの真っ赤な帽子をかぶって走ります。

さて占星術の学者たちは、自分たちの星占いの道具を駆使して、ユダヤ人の王が生まれたことを確信し、まずはヘロデ王のもとに向かいます。もしかしたらヘロデの子が生まれたと考えていたのかも知れません。ところが事実は前もって考えたことよりも神秘的でした。

ヘロデは自分の知らないところで始まった救いの計画にうろたえ、心の中では幼子を消し去ろうと考えます。すでにユダヤ人の王としてお生まれになった方、救い主イエスは、さまざまなドラマを巻き起こそうとしていたのです。ドラマは、占星術の学者にも用意されていました。

東方で見た星が先立って進み、幼子のいる場所の上に止まり、占星術の学者を救い主に出会わせます。「幼子のいる場所の上に」この表現も何かを匂わせる表現です。家畜小屋を見て、その上に輝く星を見る。これを何度も繰り返して、ついに心は喜びにあふれました。

学者と名の付く人たちが、ひれ伏して幼子を拝みます。主人公がイエス様であることは一目瞭然です。私たちも心の中でイエスにひれ伏し、この方が私たちの主であることをいつも証ししたいものです。占星術の学者たちは宝の箱を開けて黄金、乳香、没薬を贈り物として献げました。学者たちは贈り物を通して、彼らが得たこの世の知識も献げ尽くしたのだと思います。もっとすぐれた宝、救い主イエスを確かめたので、もう何も手もとに残す必要を感じなかったのでしょう。

彼らは夢のお告げによって、「別の道を通って自分たちの国へ帰って行った」（2・12）とあります。「別の道」は、救い主イエスを知らずに通ってきた道を離れ、救い主を見て礼拝して、喜びに満ちあふれて通っていく道です。それは私たちも同じことです。ミサに与り、みことばと聖体に養われ、これまでとは違った喜びに満ちて歩む道です。

この道に、さらに一つ付け加えましょう。この道は片道切符を握りしめた道です。イエスのみことばと御聖体に養われて生きる道は、別の寄り道をして養い育てられたりはしないのです。このイエスに養われ、導かれて生きる。この道を人にも証しする。この片道切符を握りしめて、私たちは自分たちの生活へ、自分たちの国へ帰って行くのです。

私はいつも、この話を神学生・志願者に向けて話します。あなたの道は、片道切符を握りしめた道なのです。途中下車して、目移りして時間を過ごし、気が向けば戻る。そんな道ではないのです。片道切符の目的地、召命の目的地は、いつも心に留めていなければならないのです。

占星術の学者たちは、救い主をひれ伏して拝んだ喜びを片道切符に、自分の国に帰っていきました。この姿をぜひ目に焼き付けて、それぞれの道を歩んでほしいと思います。学者たちは自分の国に帰って、ドラマに満ちた人生を送るでしょう。同じように救い主イエスは、すべての人に、ドラマに満ちた片道切符を用意してくださるのです。

年間第 2 主日(ヨハネ 1:35-42)

主日の福音 2024/1/14(No.1276)

年間第 2 主日（ヨハネ 1:35-42）

イエスは弟子を育て、完成へと導かれる

年間の主日に入りました。灰の水曜日、今年は２月 14 日になっていますが、この日までしばらく年間の典礼となります。朗読は「最初の弟子たち」についてでした。イエスは弟子を集め、育てています。中田神父も、「弟子」ではありませんが、生まれて初めて「助任司祭」をいただきました。集まってきた弟子を育てるイエスは最高のお手本です。

イエスはまず、弟子をご自分のもとに泊めて、暮らしぶりを見せます。「どこに泊まっておられるのですか」「来なさい。そうすれば分かる」（1・38-39）。生活を共にして、背中を見せることで最初の弟子を教え導きます。中田神父もそうありたいのですが、そもそも平成生まれの助任司祭たちは、「上司の背中を見て学ぶ」という言葉を理解するのでしょうか。

イエスは弟子をご自分のもとに置くだけではありませんでした。弟子を育てる最終段階に、「出かけていって、見たことを伝える」ここへ導きました。最初にイエスに従った二人のうちの一人アンデレは、兄弟ペトロの所に行って、「わたしたちはメシア――『油を注がれた者』という意味――に出会った」（1・41）と伝えるのです。

仮に、平成生まれの助任司祭が、昭和の人間の背中を見て学んだとしましょう。それだけでは足りないのです。イエスは「出かけていって見たことを伝える」そこまで導きました。これは、弟子を育てる最終段階、弟子を完成へと導く段階です。中田神父がそこまでできたら、少しはイエスの模範に倣うことができたと言えます。私の背中を見て学び、助任司祭二人が出かけていって見たことを伝える日は来るでしょうか。助任司祭を、完成へと導かなければ（少なくとも完成への途上へ）導かなければ、主任司祭失格であります。

イエスは、ご自分のもとに置いた弟子たちだけを完成へと導いたのではありません。「来なさい。そうすれば分かる」と、今も呼びかけておられます。誰に呼びかけているでしょうか。私たちに呼びかけておられます。そして「その日は、イエスのもとに泊まった。」（1・39）私たちはイエスのもとに、約一時間ですが、泊まっています。ミサを通して、イエスはご自分のすべてを明らかにします。

イエスが、私たちに「来なさい。そうすれば分かる」とおっしゃるのであれば、きっとその先も、私たちを導いておられます。それは、私たちが出かけていって、この場所で見たことを、伝えに行く、知らせに行くことです。

「これはわたしのからだである。」イエスは私たちに、見たもの、味わって体験したものを出かけていって伝えるように、今日も促しておられるのです。ここで見て、味わうことが最も大切ですが、出かけていって伝える時、イエスの願いは完成するのです。

年間第 3 主日(神のことばの主日)(マルコ 1:14-20)

主日の福音 2024/1/21(No.1277)

神のことばの主日 (マルコ 1:14-20)

聖霊の恵みと、神のことばの力強さを持ち帰ろう

年間第３主日は教皇フランシスコが「神のことばの主日」と呼ぶことにされた主日です。福音朗読は先週の朗読と重なりますが、ガリラヤでの伝道開始と、四人の漁師を弟子にする場面です。

先週、助任司祭が福江教会のミサをしたと思いますが、前もって「大学受験の生徒と保護者に向けて、最後は神頼みなのだから、教会に来て、力を出し切ることができるようにお祈りしたらどうか？と言いなさい」と伝えておりましたが、ちゃんと言ってくれたでしょうか。助任は躊躇するかもですが、司祭生活 30 年の主任は、ズバリ言います。

全国 49 万人の受検者が猛勉強しているわけですが、力を出し切れるようにカトリック教会でお祈りして本番に臨む人はどれだけいるでしょうか？福江教会には助け主イエス・キリストを信じている学生が必ずいると信じたいです。二次試験も控えているでしょうから、本人も保護者も、最後の仕上げをどうぞ教会でなさってください。本人が教会でできること、保護者が教会でできること、それぞれあると思います。

さてイエスは、「時は満ち、神の国は近づいた」（1・15）と第一声を発しました。ガリラヤの漁師たちも、イエスの第一声は伝え聞いていたと思います。そして、「時は満ちた」という言葉は、月の満ち欠けを大事にする漁師に強く印象に残ったのではないでしょうか。

「時は満ちた」と仰るイエスが、シモンとアンデレに「わたしについて来なさい」と呼びかけます。この「時が満ちた」タイミングをシモンとアンデレ、ヤコブとヨハネは「生き方を変える転機」と捉えたのです。イエスははっきりと転機を知らせに来たのです。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」（1・17）。これまでとは違う生き方、イエスについていく生き方に舵を切りなさいということです。

「四人の漁師は、不思議な大漁を目の当たりにして弟子になったのではなかったか」と考えている人もいるでしょう。ルカ福音書５章にはそのように書かれています。ルカ福音書よりも前に書かれたマルコ福音書は、「神のことばの力強さ」を強調するために、あえてそれらをそぎ落として書いたのかもしれません。神のことばは、「時が満ち、準備をしている人」には、ほかに何も必要としないほど、力があるのです。

本日、中村大司教様が福江教会においでになって、下五島地区の堅信式を執り行ってくださいます。中村大司教様は「神のことばの主日」においでになります。きっと、堅信式のミサの中で、堅信を受ける人たちを惹きつける力強い言葉を語ってくださるでしょう。昨年浦上教会でクリスマスミサを司式したとき、今までにない数の信徒が集まったそうです。私は、中村大司教様そのものが、神様が与えてくださった「神のことばを告げ知らせる宝の箱」ではないかと思っています。

このミサに、堅信を受ける子どもたちはいないかもしれません。しかし、受堅者の関係者はいるかもしれない。どうか戻られたら「中村大

司教様は堅信の秘跡を授けてくださって、同時に神のことばを力強く語ってくださるはずだから、しっかり聞いて、心に刻んで持ち帰ってきてね」と伝えてください。堅信の恵みは一度きり、堅信のミサで語られる神のことばも一度きりです。大人の信者として生涯生き抜く恵みを持ち帰ってくることができるように、ミサの中でともに祈りましょう。

年間第 4 主日(マルコ 1:21-28)

主日の福音 2024/1/28(No.1278)

年間第４主日（マルコ 1:21-28）

イエスの教えに耳を傾け、導かれて生きる

説教は、どうしてもまとまらなかったので９年前のものを焼き直しました。年の黙想会の日程が決まりました。説教師は今回私がします。助任神父様におだてられてすることになりました。二人とも、私を働かせるのがとても上手です。

30 日（火）司祭団マラソン大会です。10 時過ぎに堂崎天主堂を出て、９キロ走る予定でしたが、最後の最後にふくらはぎを痛め、５キロのウォーキングにエントリー変更します。助任神父さんはマラソンで颯爽と走ると思いますが、私は浦頭教会前からトボトボという感じでしょうか。今年を最後のマラソンのつもりで、また助任たちと競い合えると思っていただけに、残念でなりません。

福音朗読に移りましょう。出来事を目撃した人々は驚いて、論じ合いました。「これはいったいどういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く。」（1・27）

皆さんは「汚れた霊」にどうしても目が行くと思いますが、与えられた朗読個所でいちばん多く取り上げているのは「教え」あるいは「教える」ということです。数えてみましょう。「イエスは、安息日に会堂に入って教え始められた。」（1・21）「人々はその教えに非常に驚いた。」（1・22）「律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになった」（同）「権威ある新しい教えだ。」（1・27）

短い朗読の中で、４回も繰り返されています。つまり今日の物語ではイエスの教える姿が中心なのであって、汚れた霊を追い出すのはイエスの権威ある教えを証明する一例に過ぎないのです。

ただ中心がイエスの教える姿であったとしても、その影響が同心円のように広がっていったかというとそうでもないようです。中心であるイエスの教えるそのそばにいた目撃者たちは、「皆驚いて、論じ合った」（1・27）とあります。

たいてい「論じ合う」という場面は意見が分かれ、双方が意見をぶつけ合っているさまです。彼らはすぐ目の前でまったく新しい権威を帯びて教えるイエスを見ていながら、権威に裏打ちされた驚くべき御業を見ていながら、目の前のイエスをそっちのけにしてああでもないこうでもないと論じ合っているのです。

イエスが権威をもって教える様子、イエスの権威を裏付ける御業、これらを目撃した人々が本当にすべきことは、あれこれ論じ合うことでしょうか。この場面で汚れた霊だけが、教えるイエスに対してなすべきことを叫んだのです。

「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」（1・24）「正体は分かっている。」これは、なすべきことが分かっているから言える言葉です。もちろん実際にはなすべきことを果たしません。

そばにいた人々も、心の中ではなすべきことが何かを知っていたのです。教えるイエスに耳を傾け、その言うことを聴く。これがそばにいた人々のすべきことなのです。彼らは何をなすべきかをすでに理解しています。

ところでわたしたちは今どこに集まっているのでしょうか。わたしたちもまた、教えるイエスのすぐそばに集まっているのではないでしょうか。「これはわたしのからだである」「これはわたしの血である」と、驚くべき御業をおこなうイエスのすぐそばに集まっているのではないでしょうか。

わたしたちも、イエスのすぐそばに集まっているわけですから、あれこれと議論していてはいけないのです。むしろ謙虚に耳を傾け、「おことばをいただくだけで救われます」と、ミサの中で答えるべきなのです。イエスのおことばをいただいて思い巡らすとき、なすべきことは示されます。

もう一度確かめましょう。わたしたちの生活は、いのちを与えてくだる神が留まる場所を用意していなければ成り立たないのです。神が留まるべき場所に汚れた霊を呼び込んで、自分さえよければよい、神などいらないという生活をすれば、滅びへの道をたどるのです。

「この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く。」この言葉が私たちの信仰を表す言葉となりますように。わたしたちが選ぶことのできる正しい生活は、「教え導くイエスを生活に招き入れ、その言うことを聴く」この道しかないのです。

年間第 5 主日(マルコ 1:29-39)

主日の福音 2024/2/4(No.1279)

年間第 5 主日（マルコ 1:29-39）

悪霊の居場所は神の国に存在しない

既に結果をご存知の方もおられると思います。1 月 30 日の司祭団マラソン大会は穏やかな天気の中、無事に全員ゴールしました。一般参加の方にも盛り上げてもらいました。堂崎教会から神父様は 13 人、9 キロ走りました。浦頭教会からは 7 人が 5 キロのウォークで、ともにゴールの福江教会を目指しました。

中田神父は直前ふくらはぎに違和感を感じ、浦頭教会からの 5 キロウォークに変更して参加しました。全力で歩いた結果奇跡が起きました。なんと主任司祭が全体一位でゴールテープを切ったのです。なぜ歩いたのに走った人より早くゴールするのか？そう思っているでしょう。

理屈はこうです。堂崎からのランのトップは 42 分でゴールしました。1 分間に 215m 進む計算です。私は全力で歩いて 1 分間に 125m 進みました。当然 1 分ごとに 90m 距離が詰まってきます。それでも、4 キロメートルのハンデがあったので、ランの先頭がゴールしたとき中田神父は追いつかれなかったわけです。

あと 1 キロコースが長ければ追い付かれていたでしょう。実際には一度も後ろに付かれることなく真っ先にゴールテープを切りました。気持ちよかったです。まぁ、こういうことは二度と無いでしょう。

2 月 4 日（日）ちょっと無理をして二十六聖人殉教記念ミサに参加しようと思っています。たくさんの人の目に留まる場所で、26 人は神の国の福音を告げ知らせました。彼らにとって、イエス・キリストが生きるすべてでした。悪霊はこの世への未練を役人を通して持たせようと試みましたが、26 人は悪霊にわずかの隙も見せませんでした。

26 人の中には少年も老人も含まれていました。彼らはいのちをかけて、自分たちが神の国の住民であると証明したのです。私も、ミサに参加しながら、どこに行ってもどこにいても、イエス・キリストは私のすべてですと信仰を表す覚悟を受け取って帰りたいです。

福音朗読ですが、イエスの働きは生活のあらゆる場所に染み渡っていきました。日中、シモンとアンデレの家にいるシモンのしゅうとめがいやしを受けます。これは個人生活の中で起こったことです。さらに夕方、町中の人が戸口に集まる中、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやします。これは人々が集まる公共の生活での出来事です。

翌朝も、イエスは会堂を巡回して宣教し、悪霊を追い出されました。会堂は人々が祈り、律法を学ぶ宗教生活の場所です。こうして、ことばとわざで神の国を告げ知らせるイエスの宣教活動は、個人の生活、公共の生活、宗教上の生活と、あらゆる場所に染み渡っていきました。

一方で、悪霊はあらゆるところから追放されていきます。公共の場所からも、宗教活動の場からもです。イエスの働くところ、どの場所にも悪霊の居場所はなくなります。神の国に、悪霊の居場所はないと、はっきり示そうとするのです。

私たちも、「神の国に、悪霊の居場所はありません」これを今週持ち帰る糧としたいと思います。私たちは病気をいやしたりはできませんが、一人一人、自分に対して、出会う人に対して、社会全体に対して、「神の国に、悪霊の居場所はありません」と言うことはできます。

物語の中で家の戸口に集まった人たちは、野次馬のようにイエスの働きを眺めに来ただけかもしれません。一方でシモンのしゅうとめは病気をいやしていただいたあとに一同をもてなしました。受けるだけでなく、行いで返したのです。

私たちも、ミサに来てみことばと聖体を受けました。受けたものを一週間の中でお返ししましょう。神の国が、個人の生活にも、社会生活にも、宗教生活にも行き渡るように、何か一つイエスの宣教活動のお手伝いをして、悪霊の居場所を作らせないように努力しましょう。

年間第 6 主日(マルコ 1:40-45)

主日の福音 2024/2/11(No.1280)

年間第６主日（マルコ 1:40-45）

イエスは深いところで私たちに触れてくださる

浜脇教会は一日黙想会を含む年間第６主日です。与えられた福音朗読の中で、「イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れた」（1・40）この場面が目を引きました。もっと短く言うと、「イエスが触れた」ということです。イエスが触れると、清くなるのです。

「心に響く」ことを、日本の独特の表現で「琴線に触れる」と言ったりします。イエスが触れてくださったのは、先にイエスの御心に重い皮膚病を患っている人の言葉が触れたので、イエスがその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われたのです。「深く憐れんで」とあるのは、その人の言葉がイエスの心に触れたことの何よりのしるしです。

イエスは心を揺さぶられて、その人に触れ、重い皮膚病は去り、清くなりました。皮膚病は目に見える部分ですが、「清さ」は目に見えない部分です。激しく心を揺さぶられたイエスは、重い皮膚病を患った人の内面にまで触れてくださったのです。

しかし、イエスがその人の深いところまで触れてくださったとしても、その人自身が深い内面でイエスと出会ったかは別の話です。イエスはそれを察知して、「この人は表面的にしかわたしと出会っていない」そのことを御存知だったので、「だれにも、何も話さないように気をつけなさい」（1・44）と言われたのです。

心配していたことが現実になります。表面的にしかイエスと出会わなかったこのいやされた人は、イエスの忠告に従わず、「大いにこの出来事を人々に告げ、言い広め始めた」（1・45）とあります。イエスの忠告に聞き従っていたら、違った人生を歩んでいたでしょう。

この人がもし、深い場所でイエスに触れていたら、いやしの場面で表面的な出会いに終わっていたとしても、イエスの忠告をこれから先何度も思い返して、自分は静かな生活の中でそれを感謝すべきだと気付いたかもしれません。

この人の体験を、私たちは同じように体験することができるでしょうか。実は体験できるのです。それは聖体の秘跡とゆるしの秘跡においてです。聖体の秘跡もゆるしの秘跡も、深いところで、内面で、イエスと触れる秘跡だからです。

ミサで聖体拝領をするとき、キリストが私たちに触れてくださっています。表面的には、手のひらに触れて、舌に触れたと考えるかもしれません。もしそれだけのことならば、あの小さなパンよりも、もっと大きくて、口の中をいっぱいにしてくれるもののほうがよほど嬉しいでしょう。

表面的な感覚で終わらせず、いただいた恵みを思い巡らすと、これが私たちのために裂いて分け与えられたイエスの御体であることに気付くでしょう。そのとき、私たちはイエスと深い場所で触れるのです。「あなたの糧になります。」そう言ってイエスが先に、私に触れてくだ

さった。イエスは深いところで、私たちに触れてくださっています。

　またゆるしの秘跡を受ければ、「あなたの罪をゆるします」という言葉が耳に届くでしょう。耳に届くだけで終わるのではありません。罪は内面深くに巣くっています。そして罪のゆるしのために、イエスは十字架にかかり、私の罪を担ってくださいました。

　十字架上でいのちをささげたイエスが、私の内面深くに触れてくださった。何よりも、イエスが先に、私の罪に触れて、十字架の上で罪を背負ってくださったのです。

　イエスが私たちに触れてくださるのは、実に深い場所においてです。いつそれが分かるようになるでしょうか。イエスはあなたの人生全体を使って、いつか分かるように完成させてくださいます。イエスが私に触れてくださる。そのことが分かるときは必ず来ます。完成への道のりを歩んでいけるように、ミサの中で恵みを願っていきましょう。

四旬節第 1 主日(マルコ 1:12-15)

主日の福音 2024/2/18(No.1281)

四旬節第 1 主日（マルコ 1:12-15）

イエスのそばで仕えるというおささげ（犠牲）

四旬節、償いの季節が始まりました。四日前の灰の水曜日には、四旬節を意識するために、大斎・小斎という「断食」を使って、償いの季節を体に感じさせました。断食をどのように実行したでしょうか。

中田神父は、水曜日は本来休日です。しかし先週灰の水曜日は、前からお願いされていた一時間の講話のため休日返上でした。３月 20 日に助祭叙階を予定している神学生の準備のための講話でした。長崎教区で将来働くこの神学生に、司祭生活 32 年で、こんな喜び、こんな苦しみがあったよという体験談を分かち合いました。休日を返上したので、すでに犠牲ですが、断食の務めも可能な範囲で果たしました。

一日の食事をおよそ半分に減らす大斎の務めは、18 歳から 59 歳までです。前もって宣言しておきます。60 歳、還暦を迎えたら大斎の務めの義務はありませんので、たとえ助任司祭が灰の水曜日に腹が減って死にそうな顔をしていても、お構いなしに食べようと思います。

さてこれからの四旬節、どのように各自の償い・犠牲のわざを果たしていけば良いでしょうか。今週の第１主日の福音朗読を参考にしたいです。荒れ野での四十日間、「天使たちが仕えていた。」（1・13）これが四旬節の過ごし方のヒントだと思います。

しかしこの四十日間、サタンも登場しています。四十日間イエスが誘惑と闘ったことを実写版にするためにサタンと天使が描かれているのだと思いますが、サタンもイエスのすぐそばまで近づくことができる。これはあらためて考えさせられました。

誘惑する者・悪も、イエスに近づくことができる。イエスの働きを妨害し、失敗させる誘惑が近づくことができるのであれば、なおさら、人間が正しく生きようとすることを妨害し、失敗させようとする誘惑も、人間に近づくことができるわけです。

それ以上に天使はイエスのそばで仕えています。「イエスのそばで仕える」このために四十日過ごすことが、私たちにできる償い、犠牲なのではないでしょうか。たとえば 365 日続けることは難しいけれども、この四旬節の期間だけは実行する。期間を決めて実行する。四旬節はイエスのそば近くで仕える。そうすることが、私たちの本当の償いです。

四十日間だったら続けられる。そういうことはないでしょうか。祈ること、何かを断ち切ること、献金を四十日間だけ増やすこと、後回しにしていた教会のことをこの期間だけは真っ先に果たすなど。何か、イエスのそば近くで仕えることができるはずです。

私たちがイエスのそば近くでお仕えしようとするとき、実はサタンも、その志を諦めさせよう、良い機会を台無しにしてやろうと、近くで待ち構えています。あなたの良い心がけを食い物にしようと野獣も一緒にいるかもしれません。イエスのそばで仕える。このとうとい犠牲のわざが無駄にならないように、ミサの中で助けを願いましょう。

四旬節第 2 主日(マルコ 9:2-10)

主日の福音 2024/2/25(No.1282)

四旬節第 2 主日（マルコ 9:2-10）

イエスのそばにとどまり続けることで体験することがある

「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。」（9・5）ペトロの言葉は人間の知恵で出たものではなく、とっさに出たものでしょう。とっさに出る言葉はきっと素直な心の声です。自分の言葉を十分に理解していなくても、イエスのそばにいることがすばらしいと心から感じたのでなければ、声に出せるものではありません。

同じことは私たちにも当てはまります。自然に「イエスのそばにいることはすばらしい」と言えるのでなければ、信仰生活を維持することも、信仰を子どもたち孫たち、出会った人に伝えることもできません。

趣味やスポーツでも、喜びや楽しみが理解できていなければ、誰かを同じ趣味やスポーツに誘うことができないのと同じことです。「教えた人があとで辛い目に遭うかも知れない」そう思ったら積極的に教えたりしないはずです。

助祭時代の夏休みに、萩原神父様と鯛ノ浦小教区内の巡回教会を一緒にお手伝いして回った経験があります。楽しい時間でした。もちろん単純な楽しさではなく、苦労も味わうものでしたが、「ここに留まることはすばらしい」と、言葉に表せない何か感じたのを覚えています。

「仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」この世の光景とは思えないような場面に出くわして、それをずっととどめておきたい。ペトロはそのように考えたでしょう。たとえそれが、未熟な理解から出てきた言葉であっても、あまりのすばらしさにどうにかして留め置きたいと思った気持ちは十分理解できます。

私は、父親が 2009 年に亡くなったあとで、ビデオをいろいろな場面で撮影しておけば振り返ることができたのになぁと悔やむことがあります。たった一つだけ、牛の品評会に参加したときの映像があります。しかしいつまでそれを眺めても、そこに父親をとどめようとしても、何かが違う。そう思えてなりません。

ペトロはどうでしょうか。ペトロも、当時見た「今この瞬間」にしがみつこうとしましたが、ペトロを助ける出来事がその先に待っていました。7 節です。「すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。『これはわたしの愛する子。これに聞け。』」

光り輝くイエスを見てペトロは「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです」と叫びましたが、イエスのそばにいることで、留まり続けることで、もっとすばらしいことに出会うのです。光り輝く姿は一時的でしたが、イエスは復活して栄光に輝く姿となります。そしてイエスを信じる者にも復活の栄光にあずからせてくださるのです。

私はかつて、唯一残された映像の中の父親を、これ以上ない姿だと思っていましたが、その先があったのです。品評会で胸を張っていた父は、今はイエスのそばにいて、復活の希望に招かれている。かつて父親

に誇りと輝きを与えてくださったイエスは、今も復活を信じてその日を待っている父に輝きを与えておられる。朗読箇所のペトロに自分を置き換えてイエスのそばに留まったことで、この理解が得られたのです。どこか別の場所にいたら、この理解は得られなかったことでしょう。

「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。」私たちは今、みことばを通して、聖体の秘跡を通して、イエスのそばにいます。イエスご自身が、ここにいることはすばらしいことだと照らし、導いています。少なくとも私は、71歳で亡くなって、一つしか映像が残っていない父を悔やむ必要は無いと教えていただきました。イエスのそばにいたから、教えていただきました。

「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。」黙想会も始まります。黙想会も、イエスのそばで過ごす学びの時間です。イエスがそばにいてくださることを体験する時間です。イエスご自身がそばで教えてくれたものは、決して消えることはありません。イエスは私たち皆に「わたしたちがここにいるのはすばらしいこと」と、必ず悟らせてくださいます。

四旬節第3主日(ヨハネ2:13-25)

主日の福音 2024/3/3(No.1283)

四旬節第３主日（ヨハネ 2:13-25）

私たちの礼拝からも、イエス以外のものを運び出そう

マチアス川上忠秋神父様が亡くなりました。ここ浜脇小教区にも赴任されています。私の思い出は、現在浦上教会の主任を務めておられる山村神父様、中田神父、あと何人かでミサを一緒にささげたことがありました。今でも覚えていますが、「また復活の希望をもって『ねぶりについた』わたしたちの兄弟と」と唱えていました。たぶんずっとそうだったのではないでしょうか。

今週、想像を膨らませて考えてみました。いけにえの鳩は、あとでどうなるのでしょうか。羊と牛は、たぶん祭司をはじめ神殿で働く人々が分けて食べると思いますが、鳩は食べないかもしれません。すると鳩がたくさんいけにえに供えられても祭司は迷惑でしょう。ひょっとしたら裏で鳩は鳩売りの人々に戻されて、またその鳩を平気で礼拝に来た人に売る。鳩売りは、同じ鳩で何度も金を得ていたかもしれません。

「スカッとジャパン」という番組があるそうです。スカッとするようです。イエス様の行動も、父なる神にとってスカッとする場面だっただろうなぁと考えました。

「羊や牛をすべて境内から追い出し、両替人の金をまき散らし」（2・15）鳩を売る者たちに「このような物はここから運び出せ」（2・16）と言われる。当時、ユダヤ人の礼拝は、動物を捧げること、これしかありませんでしたから、イエスの取った行動は人々に「これまでの礼拝」と「これからの礼拝」が完全に変わることを知らせたのでした。

しかしいけにえを捧げることが当時の唯一の礼拝であったのですから、動物を追い出されたら礼拝ができなくなるのではないでしょうか。ここで私たちは考える必要があります。本当に、いけにえはすべて排除されたのでしょうか。

すべての動物が排除されましたが、イエスはそこに留まっておられます。そうです。これからは、イエスが唯一最大のいけにえとなられるのです。人々の罪のゆるしのため、人類のあがないのための完全ないけにえとなられるのです。

「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる。」（2・19）いけにえの動物と、それをささげる従来の神殿。いくらでも壊してみよと言っているように聞こえます。従来の礼拝の仕組みをどれだけ壊そうとも、イエスがこれから完全ないけにえとなる。仮にイエスを壊そうとも、三日目に復活して、このいけにえは決して失われない。今回のエルサレム神殿での強い態度は、イエスの強い決意だったのです。

もう一度、「このような物はここから運び出せ」と仰るイエスの警告に耳を傾けましょう。イエスのことばは今、私たちにも向けられています。私たちは心の中から、さまざまなものを運び出さなければなりません。

ミサの礼拝中は、イエスだけが心の神殿にあるささげものでなけれ

ばなりません。それなのに、家族や兄弟、周りの人に反感を持ったまま、礼拝に参加していないでしょうか。ミサが終わってからのことを心に抱えたままの礼拝になっていないでしょうか。

「このような物はここから運び出せ。わたしの父の家を商売の家としてはならない。」ささげものを台無しにする考えや計算高い礼拝はミサには必要ありません。あなたの心を、感謝も賛美も、嘆きもすべて、唯一のいけにえである私たちの主イエス・キリストによっておささげいたしましょう。

四旬節第 4 主日(ヨハネ 3:14-21)

主日の福音 2024/3/10(No.1284)

四旬節第４主日（ヨハネ 3:14-21）

真理を行う者は光の方に来る

黙想会お疲れさまでした。主任司祭の説教は目新しくないので、きっと忍耐して聞いたことでしょう。それだけでも四旬節の償いを積んだと思います。その償いがあって、すばらしい復活を迎えられます。

今年の司祭マラソン大会に向けたトレーニングは、生活改善に大いに寄与しました。大会一週間後に長崎市の聖フランシスコ病院で人間ドックを受けましたが、これまでですと「減量なさってください。いくつもの数値が黄色信号です。もう少し減量なされば、すべて正常な範囲内に収まるでしょう。一にも二にも、減量です。」担当の先生から毎年同じことを聞かされて、嫌な思いをしていたのです。

今年は、大会までの二ヶ月間早歩きをしました。今流行の「速歩」です。これが功を奏して、検査の数値がほとんどすべて正常値に収まりました。毎年小言を聞かされていたドクターからも、「すばらしいです。続けて努力なさってください」と褒められまして、どや顔でした。

トレーニング中祈ることも続けました。冬の北西の風は、出かけるときは向かい風で、帰り道は追い風です。準備体操をして、気に掛けている先輩や信徒の方を思い浮かべながら風に向かって歩きます。

帰り道は、風に乗ってというのでしょうか。とても気持ちよく歩くことができます。風が背中を押し、富士薬品五島営業所まで来るとまず聖マリア病院屋上のマリア様が見えます。それから福江教会の鐘楼の屋根が見えます。戻るべき場所に戻っている、近づいていると感じます。

「悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。」（3・20）まるでそれは、向かい風に向かって歩いているようなものです。真理から、イエス・キリストから離れようとすることは、文字通り闇雲に進んでいるのです。

反対にイエス・キリストの方に来ることは追い風の中で歩いているようです。「真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」（3・21）この場合、光であるイエス・キリストの方に来るための追い風は、「聖霊」です。聖霊は私たちをより早く、より軽やかに光であるお方のもとに導きます。

「真理を行う者は光の方に来る。」イエスが「正しい行いだ」と言ってくださる行いを、人は自分の努力や能力で実行できるものでしょうか。私はできないと思います。真理を行い、光の方に来るためには、いつも追い風が、聖霊の助けが必要なのです。

たとえば、「日曜日だ。教会に行こう。」真理を行おうとしますが、行かない理由を見つけることもできます。「今日は眠いから行かない。」真理を行い、光の方に来るために、追い風が、聖霊の助けが必要です。「朝晩の祈りを続けて唱えよう。」真理を行おうとしているのに、向かい風を受けて挫折します。「家族の時間が合わないから、朝晩の祈りをするのは難しい。」

日々感じる風は、追い風よりも向かい風が多いでしょう。家族の中で、自分はこれだけ頑張っているのに、どうして家族みんなが光の方に近づこうとしないのだろうか。どうして自分だけなのだろうか。そもそも私は後で洗礼を受け、家族は生まれつきのカトリック信者なのに、どうしてこうも後ろ向きなのだろうか。逆風と向かい風の中で、挫折してしまいそうになるかも知れません。

中田神父も責任を感じています。主任司祭でありながら、そっと背中を押してあげる聖霊の体験を届けきれていない。「それだったら私にもできる。」追い風を感じさせるような、促しがうまくできていない。そのために、真理を追い求め、光の方に来る人が増えない。多く任されている今の私は、多くの責任を問われています。

ここにいる皆さんが黙想会に参加した人でしょう。光の方に来るための「追い風」「聖霊の力」を感じる二日間となっていたら幸いです。手応えとしては、聖霊の風を背中に受けて、光の方に近づいてくれる人に出会えた実感はあります。すぐには芽を出さなくても、来年・再来年と時間を追うごとにその輪が広がってほしいと願います。

どんな人にも、背中を押して真理を行わせてくれる聖霊の力が必要です。聖霊の働きが追い風となった時、真理を行い、光の方に来ることができるからです。「春一番」のように、聖霊は私たちを軽やかに光の方に近づけてくださいます。聖霊の照らしを願いましょう。

四旬節第 5 主日(ヨハネ 12:20-33)

主日の福音 2024/3/17(No.1285)

四旬節第 5 主日（ヨハネ 12:20-33）

父よ、わたしをこの時から救ってください

３月 17 日、中田神父の叙階記念日を迎えました。島本要大司教様に叙階の秘跡を授けていただきました。これから 32 年目に入ります。特別な思いはありませんが、だんだん頑固になってきている気がしますので、頑なな心を砕いてもらいながら務めたいと思います。

イエスはご自身の苦しみをほとんど表に出しませんが、今週の朗読箇所 12 章 27 節はそれを言葉にしています「父よ、わたしをこの時から救ってください」。苦しみを打ち明けている箇所をあと一つ思い出しました。マルコ 14 章 35 節でイエスは地面にひれ伏し、「できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るように」と祈っています。（次の箇所も参考として。ルカ 22 章 44 節）

苦しさの極みにありながら、御父の望みに従います。「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。父よ、御名の栄光を現してください。」（12・27-28）避けて通れるものならそうしたい。けれども、一粒の麦として、死んで多くの実を結ぶことが、御名の栄光を表す道なのです。

「地に落ちて死ななければ一粒のままである。」（12・24）私はこの部分に特に目が留まりました。「地に落ちる」という表現は日本語では評判や権威が失墜することです。この箇所にそこまでの意味は含まれていないでしょうが、「地に落ちて」死ななければ一粒のままであると考えるなら、私たちにもっと強く訴えかけてくるのではないでしょうか。

この感覚を保って、読み続けます。「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。」（12・25）自分の思い描く最期にこだわるなら、それは「地に落ちて死ぬ」ということではありません。もしかしたら捨てられて、そばにいてほしい人もいないまま最期を迎えるかもしれない。そんな「地に落ちて死ぬ」ところまで受け入れるとき、この世の命を神に保ってもらい、永遠の命に至ることができるのです。

それは、今の中田神父には全く受け入れられない最期です。３月 12 日で 58 歳になって、司祭生活も確実に折り返したので、もしも余命を宣告されても受けとめるでしょう。しかし、苦楽を共にした人や、実家の家族や、そばにいてほしい人がいなくて旅立つのは耐えられません。「地に落ちて」の死は耐えられないのです。

すると、さらに続く箇所も踏み込んで考えることができます。「わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。」（12・26）イエスに全面的にお仕えしたいと考えていました。それなのに、「地に落ちて」死ぬところまでは従えません。「どんなことでも従います」と決心していたのに、すぐに手のひらを返してしまいます。

　イエスは「地に落ちて」死ななければならないのに、私は「地に落ちて」は死ねないというのでしょうか。来週の受難の一週間に向けて、本当に私はイエスのいるところに留まりたいのか、自分が留まりたいところにだけ留まろうとしているのではないか。思い巡らしましょう。

受難の主日(マルコ 15:1-39)

主日の福音 2024/3/24(No.1286)

受難の主日（マルコ 15:1-39）

御父がすべてを御子に委ねられた（1）

「だれが何を取るかをくじ引きで決め（た）」（15・24）兵士たちは争ってイエスの衣服の取り合いをしています。イエスそのものには目もくれず、衣服に群がっています。中田神父はマグダラのマリアが、イエスのご遺体を引き取りたいと言ったのを思い出しました。

「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」（ヨハネ 20・25）兵士はイエスその方には興味がありませんが、マグダラのマリアはイエスのほかには興味がありませんでした。

今年の聖週間は、「御父がすべてを御子に委ねられた。」このことを一週間黙想したいと思っています。御父がすべてを御子に委ねられた。その中に、私たちも含まれています。私たちは御子に委ねられた人間であり、聖なる一週間、私たちも自分自身を御子に委ねるのです。

イエスはすべてを奪われました。兵士から衣服を奪われ、群衆ののののしりや祭司長律法学者たちの侮辱。人としての尊厳も働きの実りも否定されました。棄てられて、権威も地に落ちて、何もかも奪われた姿で、その最期を御父に委ねます。

しかし、御父と御子の間では何も失われず、すべてが保たれていました。その場にいる人々、この典礼にあずかる私たちさえも、何も失われていないとなぜ言えるのか理解できていません。その答えは聖木曜日の朗読の中にあります。聖木曜日、夜７時に予定されている典礼に皆さんが参加して、聖木曜日のミサを完成させてくれる。その時に答えが与えられるでしょう。

衣服は奪われ、人としての尊厳も働きの結果も否定され、御子を受け取ろうとする御父には何が残されたのでしょうか。残されたのは、私たちを十字架の一つとして担って救ってくださった御子そのものです。衣服を着ているかどうかではなく、その御生涯のすべてで人々の悲しみや苦しみを担った御子イエスが、御父の受け取り分、御父にとってのすべてなのです。

御父が受け取ろうとする御子の姿をもう一度眺めましょう。十字架に付けられています。人々の嘲笑の的になっています。「わたしに従いなさい」とイエスは招いています。「主よあなたに従いますが、私が身につけている物、今まで築いてきたものまで剥ぎ取らないでください」そう言いながら従おうとするのでしょうか。

聖木曜日・聖金曜日・復活徹夜祭に参加すれば、きっと「これは身につけたままにしてください」「これは剥ぎ取らないでください」そんな気持ちも横に置けるようになるでしょう。「イエス・キリストが私に残されていればそれで十分です」ときっぱり言えるキリスト者になれるよう、聖なる三日間を可能な限り参加することにしましょう。

聖木曜日(ヨハネ 13:1-15)

主日の福音 2024/3/28(No.1287)

聖木曜日（ヨハネ 13:1-15）

父がすべてを御自分の手にゆだねられた（2）

「イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。」（13・3-4）受難の主日に予告した、御父とイエスの間では失われる物は何も無いことへの答えです。

御父が、すべてを御子イエスの手に委ねました。御父が、造られたものすべて、人類のすべてを委ねられたので、命を奪おうとする人々が何をしようと、何も奪われることはないのです。その、すべてを委ねられたイエスは、最後の晩餐の席で、今度は弟子たちにすべてを委ねようとするのです。

聖木曜日は、司祭職の制定と、聖体の秘跡を定められたことを記念する日です。司祭職の務めは、イエスが弟子たちの足を洗う場面に象徴的に示されています。それは、人の上に立つことではなく、互いに仕え合うということです。「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。」（13・15）

司祭はミサをささげます。イエス様が命のパンとなって、人々に配られ、人々が養われる。その奉仕をするのが司祭です。決して、「配ってやっている」という役割ではありません。ゆるしの秘跡では罪をゆるします。「あなたの罪はゆるされましたよ」と、イエスの働きを届けるのが務めです。その徹底した奉仕の姿が、弟子の足を洗う姿です。

今日の典礼に、私たちは一人ひとり、父なる神から呼ばれて御子イエスに委ねられました。喜んできた人も、そうでない人も、呼び集められて、すべてを委ねられたのです。どなたか、洗足式にお願いされた人がいるでしょう。そのほかにも、洗足式に加わりたい方はこの説教のあとどうぞ前に来てください。

「わたしの足など、決して洗わないでください」（13・8）とペトロは言ったのです。決して洗わないでくださいと思う人でもけっこうです。イエスのお手本に倣って、司祭があなたにお仕えします。

今日の典礼は、イエスが、儀式の形を取って弟子たちにすべてを与え尽くす日です。明日の受難の典礼は、イエスが全身を使って弟子たちにすべてを与え尽くす日です。いずれにしても、御子イエスは御父からすべてを委ねられ、そのすべてを弟子たちに託そうとします。

敵が、外からどんな攻撃をしても、何も奪われることはありません。何も失う物はありません。ですから私たちも、奉仕の模範を示してくださるイエスにすべてを委ねましょう。イエスにすべてを委ねるなら、私たちは何も奪われる心配が無いのですから。

聖金曜日(ヨハネ 18:1-19:42)

主日の福音 2024/3/29(No.1288)

聖金曜日（ヨハネ 18:1-19:42）

父がすべてを御自分の手にゆだねられた（3）

「だれを捜しているのか」（18・4）イエスがご自身をなげうって救いを成し遂げられるいよいよの場面で、最初に語られたのがこの言葉です。一隊の兵士と、祭司長やファリサイ派が遣わした下役たち、そしてイスカリオテのユダもそこにいました。

彼らは「ナザレのイエスだ」（18・5）と答えます。彼らは、だれを捜しているのか、本当に分かっていたのでしょうか。「どこのだれか」は分かっていたでしょう。ただ、イエスの呼びかけにちゃんと答えてはいないのです。

イエスは「救い主」なのですから、「救い主を捜している」と言うべきでしょう。「だれを捜しているのか」と問われて「救い主を捜している」とちゃんと答えるのであれば、そもそもイエスに手を掛けたりはしないでしょう。

ではここに集まった皆さんはどのように答えるのでしょうか。「だれを捜しているのか」昨晩のミサで考えたように、イエスは御父から御自分の手にすべてを委ねられた救い主です。「御父からすべてを委ねられたあなたを捜しています。それなのに、あなたが十字架にはりつけになる罪を担わせたのは私です。」そうとしか答えることができません。

人を憎んだり、悪く思ったり、腹を立てたり、嘘を言ったりごまかしたりした。それらを担って、イエスは十字架にはりつけになりました。そうでありながら私たちはどこまで十字架のイエスに近づくことができるのでしょうか。イエスはその答えを示してくださいました。

「兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。すると、すぐ血と水とが流れ出た。」（19・34）イエスは私たちすべてのために、裂け目を用意してくださいました。裂けたところから、私たちはイエスの最も奥深くに導かれます。イエスの御心は、私たちのために開かれています。胸に手を当てても、イエスのみ心に触れる資格はありませんが、イエス自らが、「わたしはあなたを救うためにこの傷を受けた。わたしに近づきなさい」と言ってくださいます。

最後の晩餐で、御自分を聖体として与えてくださるイエスは、十字架上では流されたその血の一滴までも与えてくださいました。与え尽くしたのは、御自分を無にして私たちが留まる場所を用意するためかもしれません。

私たちはこれから、イエスの復活のその時を待ちます。私たちにすべてを与え尽くし、私たちのすべてを受け取った方は、栄光をお受けになります。イエスは「受け取ってください」と言えるものを持たない私を受け取って、救ってくださいました。ただひたすら感謝して、今日の典礼を進めていくことにしましょう。

復活徹夜祭(マルコ 16:1-7)

主日の福音 2024/3/30(No.1289)

復活徹夜祭（マルコ 16:1-7）

父がすべてを御自分の手にゆだねられた（4）

皆さん主の復活おめでとうございます。今年の聖週間、遠ざかっていたことが復活しました。聖木曜日の洗足式です。長くお休みしていたので、ここにお集まりの皆さんの中に、足を洗ってもらった人は数えるほどしかいなくなっているかもしれません。

これは一つのしるしです。「長くお休みしていた」にも関わらず、復活することができるのです。それは儀式に限りません。私たち自身も、長くお休みしていた人がこの中に混じっているかもしれません。イエスの復活によって、その人も復活するのです。三年お休みした人がいるかもしれません。八年お休みした人がいるかもしれません。それでも、イエスが復活したおかげで復活の恵みにあずかるのです。

イエスの復活こそ、私たちが復活できるただ一つの理由です。実は私自身も、すっかりお休みしていた「体を動かす習慣」を復活させることができました。六方の浜まで歩くのが今は習慣になっていますが、それは復活したイエスが、いつも一緒に歩いてくださって「あなたはまだやるべき事がある」と励ましてくださったからできたのです。

イエスはどんな人を、復活の勝利によって復活させることができるでしょうか。教会から離れていることに負い目を感じている正直な人だけを復活させることができるのでしょうか。イエスの復活の勝利は、すべての人を、新しい人に復活させることができると私は信じています。

与えられた朗読の登場人物は、いくつかの人々の種類を表していると思います。イエスに油を塗りに行くために墓に向かう婦人たちは、イエスの復活を理解していなかった人々です。ご遺体に敬意を表すことしか考えていませんでした。しかし彼女たちは、弟子たちに復活の事実を知らせる証言者に生まれ変わらせていただきました。復活したのです。

弟子たちは、イエスが前もって復活について教えていたのに信じることができなかった人々です。イエスから一時的に遠ざかって、負い目を感じていた人です。イエスの復活を理解していない人から、理解していても信じられず遠ざかっていた人まで、イエスはすっかり新しい人にしてくださるのです。復活させてくださるのです。

聖木曜日に示した一つのことがここにも活きています。「父がすべてを御自分の手にゆだねられた」（ヨハネ 13・3）。イエスにすべてがゆだねられていたので、復活の勝利の時にすべての人を御自分のもとに引き寄せ、新しい人に変えてくださる、復活させてくださるのです。イエスは復活して、私を含むすべての人を引き寄せてくださったのです。

イエスは先に復活なさって私たちを招いてくださっています。何を畏れるのでしょう。何をためらうのでしょう。「私が今あるのは、復活したイエスのおかげです」「私が今ここに集められたのは、復活したイエスのおかげです」と、声に出しましょう。イエスはいつも先に、私たちが出会うはずの場所に来て、待っておられます。

復活の主日（日中）(ヨハネ 20:1-9)

主日の福音 2024/3/31(No.1290)

復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

父がすべてを御自分の手にゆだねられた（5）

あらためて主の復活、おめでとうございます。聖週間の典礼もこれで完了となりますが、何年、いや何十年打ち合わせを積み重ねても、打ち合わせ通りに行かなかったり、打ち合わせ以外のことが起こったりします。聖週間の典礼に慣れはない。そういうことなのでしょう。

復活の主日・日中の朗読は、徹夜祭の朗読より少ない材料でイエスの復活にたどり着く必要があります。徹夜祭では「あの方は復活なさって、ここにはおられない」（マルコ 16・6）と知らせる若者が登場します。しかし日中の朗読には、復活したことを知らせる人は現れません。

さらに、徹夜祭の朗読では親切に告げるべき内容まで教えてもらっています。「さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」（同 16・7）

しかし日中の朗読では都合の悪いことにマグダラのマリアが感じたままを告げています。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」（ヨハネ 20・2）徹夜祭の朗読と比べると、圧倒的に乏しい材料です。

それなのに、ペトロと、イエスが愛しておられたもう一人の弟子は、墓へ走って行きました。乏しい材料だったから、二人は墓へ行くことになったのかもしれません。私はここにも、御父がすべてを御子に委ねられたことが生きていると感じました。

つまりこうです。マグダラのマリアが報告したのは内容の乏しい情報でした。イエスはそれを最大限活用されたのです。乏しい情報しか伝えられない人であっても、その人は御父から御子に委ねられた人であり、イエスの手にかかれば乏しい情報で二人の弟子を動かすのです。

ペトロと、もう一人の弟子も、墓に向かったときは「イエスは必ず死者の中から復活されることになっている」（同 20・9）という聖書の言葉を、まだ理解していませんでした。理解していたなら、墓に行かずとも「あの方は復活なさったのだ」とその場で喜んだことでしょう。理解していなかった二人も、イエスの手にかかれば走って墓に向かう人、行動する人に変えてもらうのです。

イエスは今や、復活してすべての人の希望となりました。御父は御子イエスにすべてを委ねられました。私たちも御子イエスに委ねられた人です。イエスに委ねられているということは、イエスの手にかかれば、不十分な状態にあってもすばらしい体験を味わわせてもらえます。

今や私たちにとって、イエスが復活して栄光を受けた、この一つだけで十分です。復活したイエスは、まだ自分の信仰に自信の持てない人でも、すばらしい結果に結びつける力を帯びてともにいてくださるのです。「はっきり言う。カトリックの信仰が十字架を重くしている」そう食ってかかる人もいるかもしれません。その人にも復活したイエスはともにいて、最後まで十字架を担う力を与えてくださいます。

復活したイエスにすべてが委ねられているので、私たちはどんな状態にあっても良いものに変えてもらえます。ですから復活したイエスは、御父が人類に与えることのできる答えであり、すべてなのです。

神のいつくしみの主日(ヨハネ 20:19-31)

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

主日の福音 2024/4/7(No.1291)

神のいつくしみの主日（ヨハネ 20:19-31）

鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立った

今週は、転任する助任司祭に福江教会の日曜日６時と９時の司式を譲りました。前晩はローテーションなので、もう一人の助任司祭の当番と理解していましたが、直前に確認したら主任司祭になっていました。失職したかと思いましたが復職しました。明日は共同司式で何も話さないので、このミサで神のいつくしみについて考えることにしましょう。

さて、復活したイエスが弟子たちに現れる場面です。一度目は、トマスがいないときでした。二度目は、トマスもいるときでした。どちらも戸には鍵をかけていました。トマスが一緒にいたときはわざわざ「戸にはみな鍵がかけてあったのに」（20・26）と書かれています。そこへ復活したイエスが入ってきます。

復活したイエスは、「あなたがたに平和があるように」そして「聖霊を受けなさい」と仰いました。トマスが一緒にいたときに「聖霊を受けなさい」と繰り返されていません。トマスは聖霊の賜物を受けるチャンスを逃したのでしょうか。

そうではありません。トマスもほかの弟子たちと一緒に、「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る」（20・22-23）この賜物を受けたのです。本人の努力で受けたのではなく、神のいつくしみに触れて、罪を赦す聖霊の賜物を受けたのです。

トマスは真っ先に、神のいつくしみに触れたのだと考えています。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」（20・25）と心を頑なに閉ざしました。神のいつくしみは、誰よりも心を閉ざしている人に先に届けられ、ゆるしといやしの恵みにあずかることになったのです。神のいつくしみは、頑なに心を閉ざしている人に、真っ先に向けられるのです。

私たちにも、神のいつくしみの働きは同じです。トマスが一緒にいたとき、「戸にはみな鍵がかけてあった」のでした。鍵をかける場所は、家の戸だけではないでしょう。私たちは自分の心に鍵をかけて、誰も入れないようにすることがあるのではないでしょうか。頑なに自分の中に閉じこもり、人との関わりを拒んでいるあなたに、神のいつくしみは先に届けられるのです。

しかしどうやって、誰にも心を開かない人に、鍵がかけてある心に入ることができるのでしょうか。それは聖霊の力です。「聖霊を受けなさい」との呼びかけに、すべてが委ねられているのです。聖霊を受けようと心を開く人にはもちろん、「戸にはみな鍵がかけてあった」そんな人にも、聖霊はおいでになり、神のいつくしみを届けてくださいます。

すべての人に、特に、心の扉に鍵をかけている人に神のいつくしみが届きますように、ミサの中でお祈りいたしましょう。主任司祭も、日曜日は共同司式の中でお祈りいたします。

復活節第３主日（ルカ 24:35-48）

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

主日の福音 2024/4/14(No.1292)

復活節第３主日（ルカ 24:35-48）

イエスを真ん中に迎えるとき、平和が与えられる

復活節第３主日は、長崎教区の司祭が異動して、新任地で最初の主日ミサをささげる日です。中田神父も何度も経験してきました。福江小教区では洪助祭様が、初赴任の福江教会で福音朗読と説教をなさいます。前晩のミサでデビューしました。緊張したことでしょう。上手に話そうと思うのではなく、誠実に語ってくれることを期待しています。

今週の福音朗読を、説教する司祭や助祭に当てはめると、「イエスが彼らの真ん中に立ち」（24・36）という場面がどれほど大切であるかを教えてくれます。説教者によって、聞いていて飽きない説教をなさる人、７分から８分の説教が、10 分にも 15 分にも感じる説教の人、いろいろだと思います。

その違いはどこから来るのか。私は、説教者の真ん中にイエスが立っているかどうか。そこが分かれ目だと思っています。いくら楽しい話をたくさんしても、ミサに参加している修道者・信徒の皆さんの目は節穴ではありません。「説教の中心で、イエスが語られているか」そこを見抜きます。いくら笑いの絶えない話でも、真ん中にイエス様がいない説教を聞かされれば、「早く終わってくれ」と思うに違いありません。

今週の福音で、イエスは弟子たちの真ん中に立ちました。場所としての「真ん中」という意味だけではありません。失意の中にあって、頼るもののない弟子たちの真ん中にイエスが立ってくださった。拠り所となる中心に、イエスが来てくださったのです。真ん中にイエスが来てくださるとき、私たちには平和が訪れるのです。

ただ避けて通れない事実もあります。イエスは私たちの真ん中に立ち、「手とわき腹とをお見せになった」（24・40）のです。手にはおそらく釘跡があり、わき腹には槍で刺された傷があるはずです。イエスを置いて逃げた罪、イエスが苦しみを受けても何もすることができなかった罪を、もう一度見なければなりません。人類の罪がイエス様を十字架にかけた事実と、しっかり向き合わなければならないのです。

イエスは御自分の死と復活を通して私たちを救ってくださいました。イエスは私たちにも、生活の真ん中に復活したイエスが留まることを期待しています。拠り所のない生活をしている人、社会生活の中で競争を強いられている人。どんな人でもイエスへの信仰を生活の真ん中に置くならば、復活したイエスがいつも「あなたがたに平和があるように」と力づけ、励ましてくださいます。

例えるなら、それは「芯の通っている人」です。信仰生活の真ん中に「復活したイエス」という芯の通った生き方をする人です。説教をするときに「復活したイエス」という芯の通った説教をする人です。私たちが、真ん中にイエスが立ってくださることを受け入れるなら、私たちの一つ一つの働きが復活したイエスを証しすることになります。復活したイエスへの信仰が私たちの中心にあるなら、証しの力が与えられます。「エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる」（24・47-48）のです。

復活節第４主日(ヨハネ 10:11-18)

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

主日の福音 2024/4/21(No.1293)

復活節第 4 主日（ヨハネ 10:11-18）

羊飼いイエスはすべての羊のために命を置く方

新しく迎えた助祭様、よくやってくれています。ミサの中で、「お互いに平和のあいさつを交わしましょう」それと「感謝の祭儀を終わります。行きましょう、主の平和のうちに」を聞くと、私にもこんな時代があったのだなぁと身が引き締まります。頑張りすぎて、疲れてしまわないか心配です。

金曜日でしたが、小学校の遠足と思われる長い行列を見ました。先生方が一定の間隔で導いていました。先頭の列は上級生なのか、ほとんど先生の手を借りずに颯爽と歩いています。後ろの方になるにつれて、小さなお友だちが、先生の手厚いサポートで遅れないように歩いていました。

しかし、一団についていけない子供たちもいました。ある子供は上級生が手を握ってくれていました。ある子供は、先生が一人つきっきりで歩き、その子を励まし続けていました。どの子供たちも、目的地まで無事に着いてくれよと、願わずにはいられませんでした。

福音朗読を読み返しましょう。イエスはご自分を「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」（10・11）また、「わたしは良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている」（10・14）と仰っています。

この羊は黙っていてもついてくる。この羊は時々迷うので時々声を掛ける。この羊はつきっきりでお世話をしなければ、見失い、命を落とす。どの羊のこともよく知っています。羊も、羊飼いに全面的に信頼しています。イエスと、御父からイエスに託された人々との間には、深い信頼関係があります。

羊飼いであるイエスは、羊の囲いに入っていない羊も含めて、すべての羊を導こうとします。手のかからない相手も、つきっきりでいなければならない者も、命を捨てる必要がある者も、どんな相手もかけがえがないのです。

どんな人間も、イエスにとってはかけがえがない。それは、自分の力では正しく生きることのできない人間に対する神の愛が、常に無償だからです。どんなに手のかかる人も、反対に手のかからない人も、あふれるほどの愛で愛されています。その証拠が、「良い羊飼いは羊のために命を捨てる」ということです。

日本語訳の「命を捨てる」という部分は、ギリシャ語聖書にそって訳せば「命を置く」となるそうです。すると 10 章 18 節「わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる」は、「わたしは命を置くこともでき、それを再び受けることもできる」となります。命を置くことができる方は、神であるイエス・キリストお一人だけです。

良い羊飼いであるイエスは、時に、見守るだけでよい私のために命を置いてくださいます。時に、九十九匹を野原に残してでも、私のために命を置いてくださいます。ご自分の羊のためなら、どんなことでもする。それが羊飼いイエスであり、信徒・奉献生活者・聖職者の模範なのです。信頼を持って、ついていくことにしましょう。

復活節第 5 主日(ヨハネ 15:1-8)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

主日の福音 2024/4/28(No.1294)

復活節第 5 主日（ヨハネ 15:1-8）

見えるしるしを通してぶどうの木イエスに繋がる

新年度から主任司祭と助任司祭と助祭の組み合わせでスタートしました。ミサの割り当てには、司祭が三人の時よりも慎重になります。福江教会、井持浦教会、浜脇教会の三小教区に、二人の司祭が偏らずに担当できているか。

助任司祭の負担が重くなってないか。助祭は単調な奉仕ばかりになっていないかなど、考えることがいっぱいあって日々綱渡りです。主任司祭は管理職なので多少のストレスは覚悟の上ですが、助任司祭や助祭にはストレスを抱えさせたくないのが本音です。

そんな中、平日に久賀修道院のミサに行ってきました。久賀修道院のミサは「修道院担当」が回ってきた司祭が当番になります。13 時 35 分福江港出発の船に乗って、14 時前に上陸して、16 時にミサをして 17 時半に奥浦港に到着です。福江港から出発して奥浦港に戻ります。

14 時に久賀島に上陸ですから、修道院の 16 時ミサまで 2 時間あります。2 時間は結構な時間ですので、この時間で日曜日の説教でも考えてみようと思い、少し材料を持ち込みました。最高に静かな環境の中で日曜日の福音朗読をしっかり読み味わえるな、と思っていました。

いざ読み込もうと思ったとき、予想外のことが起こりました。司祭館周辺に人影が見えるのです。磨りガラス越しなので誰かは分かりませんでしたが、たしかに人がいます。そうこうしているうちに今度はチェーンソーの音が聞こえ始めました（音真似）。どうやら、教会と司祭館周りの木を切って、日曜日のミサの時に気持ちよく参加できるよう作業に来てくれていたのでしょう。

作業している信徒の方はご苦労さまなのですが、可哀想に主任司祭は当てにしていた静かな環境は諦めなければなりませんでした。ただ、文字にはまとまりませんでしたが、周辺で伐採作業をしている音を聞きながら、与えられた朗読箇所のうち、響いてくる箇所がありました。

「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。」（15・4）中田神父は自分への呼びかけとして受けとめたのですが、浜脇で日曜日に信徒の皆さんが気持ちよくミサに参加できるよう平日に作業に来てくれた。その信徒の方はご自身の働きを通して教会と教会におられるイエスに、繋がってくれたのです。一人の人の働きが、多くの人のミサ参加を快適なものにしてくれました。イエスに繋がって、多くの実を結んだのです。

それに比べて、司祭館にじっとして人影に気付きながら様子を見に行くこともせず、声もかけなかった主任司祭は、作業に来てくれた信徒を通してイエスに繋がる良い機会だったのに、機会を逃してしまいました。日曜日の説教を準備しようと静かな環境を当てにしました。むしろ私は、作業に来てくれた信徒にすぐに会いに行って声をかけていれば、もっと早くに説教もまとまったのだと思います。後になって気付いたこ

とでした。

「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない。」

イエスの呼びかけは、十分理解できる内容です。しかし、「実を結ぶ枝」はいきなりぶどうの幹に繋がっているわけではありません。ぶどうの幹にすでに繋がっている枝があって、その枝を通して幹に繋がっています。作業に来てくれた信徒は、教会敷地の景観を通して、ぶどうの幹であるイエスに繋がった。中田神父も、作業に来ていた信徒を通して、ぶどうの幹であるイエスに繋がることができたのです。

私たちは、ぶどうの木であるイエスに繋がることで豊かに実を結びます。実を結びますが、イエスに繋がるせっかくのチャンスを見落とす危険もあります。あなたのすぐそばにいる人が、ぶどうの木であるイエスに繋がる確かな枝かもしれません。

復活節第 6 主日(ヨハネ 15:9-17)

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

主日の福音 2024/5/5(No.1295)

復活節第６主日（ヨハネ 15:9-17）

あなたも「互いに愛し合いなさい」に招き入れられる

五月になりました。教会は五月を「聖母月（マリア様の月）」と呼びます。いつもより 30 分早くミサに来て、マリア様にささげるロザリオの祈りに参加しましょう。イエス様は「わたしの愛にとどまりなさい」（15・9）と招いています。五月はロザリオを唱えることで、マリア様を通してイエス様の愛に留まることにしましょう。

五月五日は「こどもの日」です。今日は、子供たちにも届いてほしいなぁという気持ちで話しています。与えられた福音朗読のいちばん最後をもう一度読みましょう。「互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である。」（15・17）

これは、今日の福音のまとめだけでなくて、イエス様が私たちに求める生き方のまとめでもあると思います。ちょっと言い方を変えると、「互いに愛し合うこと」は、イエス様が私たちに求めている「必要なこと」です。

「必要なこと」と言いました。ルカ福音書の中の「マルタとマリア」の物語を思い出しました。イエス様はマルタにこう言います。「しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」（ルカ 10・42）「互いに愛し合う」ことは、イエス様が私たちに求める「ただ一つの必要なこと」そう言えるかもしれません。

「ただ一つの必要なこと」が「互いに愛し合うこと」なのですが、「互いに愛し合うこと」は、そんなに簡単ではありません。学校やクラブで、仲良くできる人よりも仲良くできない人の方が多いかもしれません。仲良くできない人が多いとしたら、「互いに愛し合う」ことは非常に難しいです。それなのにイエス様は、「互いに愛し合いなさい。これがわたしの命令である」と言っています。「できればお願いします」と言っているのではありません。「命令です」と言っているのです。

イエス様は、無理と分かっているのに命令する方だと思いますか？中田神父はそうは思いません。難しい命令かもしれませんが、必ずやり遂げるための力と助けを与えてくださいます。仲良くできない人の方が多いとき、イエス様の力と助けがなければ、命令をやり遂げることはできません。どこで、その力と助けをいただけるのでしょうか。

力と助けをいただく場所、それは今参加しているミサの中なのです。ミサに参加し、聖書の言葉と御聖体でイエス様に交わり、いただいたイエス様の愛を人々に分かち合いに行く（「宣教」のことです）。今参加しているミサが、仲良くできている人ともできていない人とも互いに愛し合う力と助けをいただく場所なのです。いただいたイエス様の愛を分かち合うことで、愛し合うことができるようになります。

今日の説教は「こどもの日」を少し意識して話しました。目の前で話を聞いた子供たちは少ないかもしれません。けれどもこのミサの説教をあとで見たり聞いたりした人が、もう一度子供たちと一緒に観たり聞いたりしてくれたら嬉しいです。一人でも多くの人が、「互いに愛し合いなさい」というイエス様の声に、耳を傾けることができますように。

主の昇天(マルコ 16:15-20)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

主日の福音 2024/5/12(No.1296)

主の昇天（マルコ 16:15-20）

洗礼式は、すべての造られたものに伝えられた福音

今日、浜脇教会に大きな喜びが与えられました。教会としては大きくないかも知れません。けれども神様は、浜脇教会家族にも大きな喜びを与えてくださるのです。典礼は、主の昇天を祝っています。天に昇られたイエス様は、私たちに大きな喜びを与える力を持つお方です。

復活したイエス様が、天に上げられる前に弟子たちに語ったことは、三年間一緒に暮らす中で語られたどの言葉よりも大胆なものでした。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」（16・15）福音とは、神がイエス・キリストを通して私たちのためにおこなってくださったすべてのことです。

それは、聖霊によっておとめマリアから生まれ、ことばと行いで神の国を告げ知らせ、十字架にかけられて死に、三日目に復活し、天に昇り、聖霊を送って、生者と死者を裁くために来られる。これらのことです。この福音を全世界で、すべての造られたものに宣べ伝えるのです。

ではどのようにして「全世界に」宣べ伝えるのでしょうか。すべての国の言葉で福音を知らせるとき、全世界に宣べ伝えることになります。現代ではすでに、あらゆる国のあらゆる言葉で、イエス様の救いの働きが宣べ伝えられています。私たちは私たちの言葉で、宣べ伝えます。

もう一つ、どのようにして「すべての造られたものに」福音が宣べ伝えられるのでしょうか。一つの例が、今日行われる洗礼式です。人間の命は、小さな命ですが、すべての造られたものの中で最も複雑で神秘的です。これほど複雑で神秘的な命に洗礼の恵みを注ぐことは、すべての造られたものに向けてのすばらしい福音宣教だと思います。

こうして私たちは、現代にあって、全世界に福音を宣べ伝え、すべての造られたものに福音を宣べ伝えています。いただいた恵みを大切に守っていきましょう。「守る」方法は二通りあります。誰にも見つからないように隠しておくか、恵みを育んでいくかです。洗礼の恵みを守るとはどちらを意味しますか？もちろん育んでいく方法のことです。

幼児洗礼は初めのうちは、御聖体をいただくことも、聖書の言葉を味わうこともできません。しかし聖体拝領の列に並んで、頭に司祭の手を置いてもらい、祝福をいただきます。これは立派な「恵みを育む道」です。徐々に恵みに近づき、イエス様から養ってもらう準備になります。

教会に近づいて恵みを育むことは、天に昇ったイエス様に近づいて育んでもらうことでもあります。今や「天と地の一切の権能を授かっている」（マタイ 28・18）イエス様が、私たちとともに働き、宣教の使命を続けさせてくださいます。

先週浜脇教会からの帰りぎわ、洗礼を控えたご家族のお子さんが私を見て「アーメン、アーメン」と言っていました。「彼らは新しい言葉を語る。」（マルコ 16・17）十分に、この子は「信じる者には次のようなしるしが伴う」(同)とのイエスの予言を実行していると思いました。

　天に行かれるイエス様が、これからも聖霊を通して恵みを注ぎ続けてくださいます。その恵みを、あなたは誰にも見つからないように隠して守り続けますか、育んで守っていきますか。どんなことでも、隠し続けることはできません。個人で、家庭で、教会家族で恵みを育んで、守っていきましょう。天に昇られたイエス様もそれを望んでおられます。

聖霊降臨の主日(ヨハネ 15:26-27;16:12-15)

主日の福音 2024/5/19(No.1297)

聖霊降臨の主日（ヨハネ 15:26-27;16:12-15）

言っておきたいことは、まだたくさんある

「言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。」（16・12）長崎教区で聖書愛読の取り組みが始まって、もう 20 年くらいなるでしょうか。よく「カトリック教会の人はプロテスタント教会の人に比べて聖書を読む量が少ない」と思われています。

実際そうかもしれません。それでも、遅ればせながら聖書愛読や聖書の分かち合いが教会の中で、小共同体の中で進められた結果、聖書の物語の箇所が思い出せる人もいらっしゃるでしょう。

たとえばルカ福音書の 15 章は「見失った羊」のたとえ、「無くした銀貨」のたとえ、「放蕩息子」のたとえです。もう一歩踏み込んで、ルカ 15 章 15 節の「聖句」を覚えている方はおられるでしょうか。ここはカトリック教会の人々の弱い部分です。プロテスタント教会の人々は、物語の一節一節まで覚えている人が多いです。頭が上がらないです。

疑問は早めに解決しておきましょう。ルカ福音書 15 章「放蕩息子」のたとえ、その中の 15 章 15 節は「それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた」でした。あまり見栄えのしない箇所に見えますが、物語は弟が畑に送り込まれて豚の世話をした、そこから大きく展開していきましたから、その意味では覚えておいてよいでしょう。

ほかにも、聖書愛読などを通して覚えた聖句があるかもしれません。または、3 月の黙想会で話したように、登場人物に結び付けて聖句を覚えた人もいるかもしれません。ここで一つ問題があります。学んだり覚えたりしたその聖句は、どこで使えばよいのでしょうか？

諺や、四字熟語は覚えたものをすぐに生活に活かせるかもしれません。しかし聖書の言葉、聖句は、生活にはなかなか結び付かないと思われがちです。いつ、覚えた聖句の出番はやって来るのでしょうか。

福江教会には今年助祭が派遣されています。助祭はミサがまだできないし、ゆるしの秘跡もまだできません。「仕事の場所が限られてくるなぁ」と心配していたのですが、すぐにそれを補うすばらしいものを持っていることに気付きました。それは、「聖書の言葉を思い出させ、理解させてくださる」ということです。

こんなことがありました。「わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします。」（使 6・4）これは使徒言行録の中で、今で言う助祭を選び出したあとに使徒たちが語った言葉です。言葉自体は聖書を何度も読む中で覚えていましたが、生活の中で生きてくる場面があるなどとは夢にも思いませんでした。

助祭様が来てすぐ、ミサの打ち合わせをしました。主任司祭はこの部分をしますから、助祭はここここを受け持ってください。そういう打ち合わせです。その中で「聖体拝領は助祭ができることなので助祭がしてください」とお願いしたのですが、「でも助祭に丸ごと聖体拝領を

任せたら、偉そうに見えるかなぁ」と言いましたら、助祭様がこう答えたのです。「いえ、主任神父様は席で待っていてください。『わたしたちは、祈りと御言葉の奉仕に専念することにします』あれです。」確かにそうだなぁと思いました。

　これは、聖霊が助祭を通して語ってくれたことでした。聖霊は使徒たちの時代から変わらず私たちに注がれて、聖書の言葉を解き明かしてくれるのです。聖書の言葉が私たちの生活に染み渡ることを教えてくれるのです。生活の出来事の中に、聖書で表せる部分があるわけです。

　そこで、聖霊降臨の主日にちなんでもう一箇所覚えていってください。ルカ福音書 12 章 12 節です。こう書かれています。「言うべきことは、聖霊がそのときに教えてくださる。」すばらしいと思いませんか。聖霊降臨の主日に、最高の聖句を与えていただきました。

三位一体の主日(マタイ 28:16-20)

主日の福音 2024/5/26(No.1298)

三位一体の主日（マタイ 28:16-20）

送り出す方、送られる方、永遠に続く

フランシスコ教皇様は、今年、世界子どもの日を定め、5月25日と26日二日間にわたって子供たちとの集いを開きます。この日に合わせてメッセージも発表なさいました。年齢は離れていますが、教皇様はローマに集まった世界中の子供たちに、慈しみ深い父として接してくださり、すべての子供がイエス様に愛されていることを届けてくださいます。

本日、三位一体の主日です。叙唱に次のようにあります。「聖なる父、全能永遠の神、（中略）あなたは御ひとり子と聖霊とともに唯一の神、唯一の主です。わたしたちは父と子と聖霊の栄光を等しくたたえ、三位一体の神を信じ、礼拝します。」中田神父はこの神秘を、「唯一の神の中に御父・御子・聖霊を見る」そのように説明したいと思います。

神がお一人であることは、何人も神様がいるより、理に適っています。神様が何人もいるというのであれば、ある一つのことの神様がいて、また別のことの神様がいることになります。なぜ、両方のことをお一人の神様ができないのでしょうか。そう考えると、神がお一人であることは十分納得できます。

その上で私たちキリスト者は、唯一の神の中に、御父・御子・聖霊を見るわけです。唯一の神ですが、三つの面を持っています。例えてみましょう。井持浦にルルドの泉があります。泉の中に、湧き出させる力があり、湧き出る水があり、水が豊かであればいつまでも湧き続けます。

湧き出させる力、湧き出る水、いつまでも湧き出ること。この三つが一つになって、井持浦のルルドが成り立っています。もちろん完全な泉は存在しないので、永遠に湧き続けることはできないかもしれません。

そのように唯一の神の中に、救い主を送り出す方、救い主として送り出される方、永遠に続く救いの働きは一つなのです。誰かが別の誰かを送り出しているのではなく、唯一の神の中に、送り出す働き、送られる働き、永遠に続く働きがあるのです。御父・御子・聖霊の姿を見るとは、そういうことではないでしょうか。

十分な説明は、きっと誰にもできないと思います。不完全ですが、毎年こうして思い巡らすことは大切です。そしてもう一つ大切なことがあります。思い巡らすだけでなく、三位一体の神の働きを、私たちが見倣うことも大切なことです。私たちが、「送り出す働き、送られる働き、その働きを続けていくこと」この三つを教会生活の中に取り込むことが、頭で理解すること以上に大切なのだと思います。

私たちの教会生活に、この三つが見いだせるでしょうか。じつはミサは、この三つの働きを実現する場所なのです。「行きましょう主の平和のうちに」「神に感謝」ミサの最後は派遣です。派遣の中に、送り出す働きがあり、送られる働きがあり、その働きを続けていくこと、この三つがすべて含まれています。私たちが三位一体の神秘を頭で理解しようとする、それ以上に体験によって実践によって、三位一体の神が私た

ちの救いのためにすべて必要なことをしてくださったその愛を学びたいものです。

（教皇フランシスコのメッセージ一部引用）

聖霊、来てください。
あなたのすばらしさが
世界のこどもたちの顔に映し出され
わたしたちに示されますように。
イエスよ、来てください。
あなたはすべてを新たにし
わたしたちを御父へと導く道です。
来て、わたしたちとともにいてください。
アーメン。

ローマ
サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ大聖堂
2024 年 3 月 2 日
フ ラ ン シ ス コ

キリストの聖体(マルコ 14:12-16,22-26)

主日の福音 2024/6/2(No.1299)

キリストの聖体（マルコ 14:12-16,22-26）

私たちの準備を用いて世界に一つだけのものを

主の昇天から続く祝祭日も、今日のキリストの聖体、金曜日のイエスのみ心をもって終わります。いつものことですが、主の昇天・聖霊降臨・三位一体・キリストの聖体・イエスのみ心、この連続する祝祭日はよく覚えておきましょう。

キリストの聖体の祭日に用意された福音朗読は、最後の晩餐の場面です。イエス様は、弟子たちの準備を最大限用いて聖体の秘跡を制定する主の晩さんをおこないました。

イエス様は、世界に一つだけの食事の席を用意してくださいました。パンを用いてご自分の身体を与え、ぶどう酒を用いてご自分の血を与えてくださいます。私たちを養う食べ物、永遠に生きる食べ物となってくださいました。

イエス様の指示を受けて都に行った弟子たちは、席が整って用意のできた二階の広間に、過越の食事を用意しました。食卓のパンとぶどう酒は、おそらく弟子たちが用意したのでしょう。弟子たちが準備したものを、イエス様は確かに用いられたのです。

こう言って良いのではないでしょうか。イエス様は、私たち人間の準備を用いて世界に一つだけの食卓を用意してくださった。では私たちの時代にあって、この準備はどんなものでしょうか。単に祭壇上に整えられたパンとぶどう酒だけが、私たちの準備でしょうか。

それ以上のものだと、中田神父は考えました。祭壇上に供えられたパンとぶどう酒を支えているのは、本日お集まりの皆さんであり、皆さんの祈りと献金のおかげでしょう。今日ここに集まることのできなかった方々の祈りと犠牲も、祭壇上のパンとぶどう酒を支えています。

また、聖体の秘跡をこの祭壇上で続けていく司祭も、パンとぶどう酒がイエス様の御体と御血になるために長い時間をかけて用意されたものと言えます。さらに、司祭を助けてくれている助祭も、キリストの聖体を届けてくれるために長い間準備して用意されました。すると、ここに集められたすべてのものが、イエス様に受け入れられて、世界に一つだけの食事の席となっているわけです。

おとといの午後、教会前で草取りをしている方を見つけました。「ご苦労さまです」と声をかけました。すぐその後に石垣に張り付いた蔦（つた）を取り除いている方にも会いました。感謝の気持ちでお辞儀をして行きました。こうした方々の奉仕も、キリストの聖体の祭日を成り立たせている隠れた準備だと思っています。ありがとうございます。

教会に集い、聖体祭儀を祝うすべての準備が、イエス様に用いられて今日キリストの聖体の祭日となりました。さらに、目には見えませんが、私たちの心も、パンとぶどう酒とともにささげられ、イエス様に用いられ、キリストの聖体に変えられていきます。

感謝の気持ち、赦しを願う気持ち、平和を願い求める気持ち。私た

ちの心もパンとぶどう酒とともにささげられ、イエス様はそれを受け取って御聖体に変えて与え返してくださいます。悲しみが悲しみで戻って来るのではなく、悲しみも喜びも、愛の形見・御聖体として戻って来るのです。

　私たちも、キリストの聖体の祭日に、受け取ったものを愛でお返しする人に変わりましょう。私たち自身が、愛の形見・キリストの聖体を受けた証しに、イエス様のなさり方を世に示していきましょう。

年間第 10 主日(マルコ 3:20-35)

主日の福音 2024/6/9(No.1300)

年間第 10 主日（マルコ 3:20-35）

イエスは敵対する人を縛って、私たちを自由にする

痛恨のミスをしました。過ぎた金曜日は「イエスのみこころ」の祭日で、福江教会と浜脇教会両方が献げられた祝日でした。お知らせをして、一人でも多くこの日のミサに参加してもらうように、祈ってもらうように呼びかけるべきでした。主任司祭として恥ずかしいです。

ここからは毎度のことです。説教って、難しいです。どうしても分からない朗読箇所にぶつかると、「これをどう理解すれば良いのだろう」と悩んでしまいます。今週もそういう箇所がありました。3 章 27 節です。「また、まず強い人を縛り上げなければ、だれも、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。」なぜイエス様が、このような荒っぽい例えを使うのでしょうか。

理解に苦しんでいたのは「強い人」にたとえられているのが誰かということでした。二つ考えてみました。一つは、悪霊（サタン）です。サタンはこの世では勢力があります。ですからこの世の勢力であるサタンに支配されている人々を解放するためには、サタンを縛り上げて取り返す必要があります。

もう一つ考えたのは、律法学者たちに代表される当時の宗教指導者たちです。宗教指導者たちも民衆を抑圧し、民衆を身動きのできない家財道具のようにしてしまっていました。そこでイエスは宗教指導者が手も足も出せないようにしてから、民衆を解放してくださいました。

二つ考えてみましたが、ひょっとしたら第三の「強い人」がこの世にはいるのかもしれません。誰かが、言葉や態度で他者を圧迫し、身動きが取れないようにしているとしたら、その人はサタンであり、神に敵対する勢力です。

そのような人をイエスはお許しになりません。動けないようになっている人をイエスは必ず見つけ出し、圧迫している人を縛り上げ、助け出してくださいます。「いやいや。私は誰も圧迫していない。私は神様の敵対勢力ではない。」自分ではそう思っていますが、私たちにも、第三の「強い人」の側に立つ危険はあると思っています。

家族に対して。周りの家族がいくら言い聞かせようとしても、全く耳を貸さない。反対に声を荒げて押さえつける。すると家族は「言っても無駄だ」と諦めてしまいます。家族はその人に何も言わなくなってしまいます。その原因を作ったあなたは、第三の「強い人」「神に敵対する人」になってしまっているのです。

イエス様は、この世の「強い人」「神に敵対する人」をお許しになりません。必ず縛り上げて、圧迫されている人を解放してくださいます。たとえを通して示されたことは、私たちの希望の拠り所です。私たちはいろんな形で押さえつけようとする人に諦めてしまったり絶望したりしますが、イエスは決して圧迫する人を放置せず、縛り上げてくださる。

圧迫されている人を解放してくださる。常にこの希望を保って生きていきたいものです。どんなに圧迫されていても、イエスを信じているなら、希望を取り上げられることはないのです。

　イエスを信じ、イエスに希望を置くことで、「私たちはイエスから兄弟姉妹としていただいたのです」と誇りを持って言える信徒でありましょう。たとえ見た目は弱くても、イエスの力は弱さの中にこそ働きます。

年間第 11 主日(マルコ 4:26-34)

主日の福音 2024/6/16(No.1301)

年間第 11 主日（マルコ 4:26-34）

実を付けさせてくださる神に全幅の信頼を置く

すでに福江教会にはお知らせしていますが、今週は助任司祭が黙想会出席のため留守をします。さらに主任司祭が地区長として顧問会に出席するので助祭だけが島に残る曜日があります。「曜日がある」と濁したのは、正確に話すと防犯上の問題が生じるかも知れないので曖昧にしています（ほかにも司祭を守る目的もあります）。

助祭はミサが出来ませんので、何も手を打たなければ平日のお世話を休まなければなりません。幸いに助祭には浜脇小教区・井持浦小教区で「みことばの祭儀と聖体拝領」を何度か経験させています。それで福江小教区でも、今回思い切って「みことばの祭儀と聖体拝領」をさせることにしました。福江教会にこんなに早くその日がやって来るとは思ってもみませんでした。助祭様は福江に来たことで相当鍛えられています。

福音朗読は、「成長する種」のたとえから始まる箇所です。種を蒔いたら、その種は知らないうちに成長し、ひとりでに実を結ぶとあります。蒔かれた種には、見えないけれども神の働きが続いていて、人が寝起きしているうちにいつの間にか成長して、実を結ぶというのです。

もちろん人が手を入れて、お世話しているのですが、お世話しているその人も、例えば水やりをしたことがどのように芽を出すことに繋がるのか、実を結ぶことに繋がるのか、分かっていないのです。種蒔きから始まって、人がお世話したことがどのように実を結ぶことに関わっているのかをご存知なのは神だけなのです。

本人がどうしてそうなるのかを知らないというのは実に不思議なことです。着実に芽を出し、実を付けているのです。お世話している人の力なのではないでしょうか。「あなたが芽を出させ、実を付けさせているのだよ」と自信を持たせたらどうでしょうか。ただ、お世話する人はそれを受け入れないでしょう。ぼんやりとではあっても、芽を出させ、実を結ばせているのは神なのだと理解しているからです。

これは、「誰に信頼を置くべきなのか」ということを教える大切なたとえなのだと思います。私たちは多くの場合、自分の手の中で物事を考えがちです。子育てをしているとき、「これだけのお世話をしたのに、どうして期待したところまで成長してくれないのだろうか」と思い悩むことがないでしょうか。

中田神父は、司祭召命について似たようなことを考えます。これだけのお世話をしたのに、どうして道を続けられなかったのだろうか、残念に思うことがあります。直接司祭召命に関わっている小神学院の担当者、大神学院の担当者たちはもっと責任を感じていることでしょう。

しかし今日のイエスのたとえは、神の国は人間の手の中でいくら考えてもその通りにはならないよ、と教えているのです。人がいくら何をしてもどうにもならないのではなく、神の国の成長を信じて、お世話をする。そうすると、人間の考えのその先で、神様が思い描いた実りが待

っているということです。

あらためて、神の働きに信頼を置いて、自分にできるお世話を続けていく覚悟が求められています。他の箇所のたとえでは、ぶどう園の収穫を受け取るために、僕を送り、さらに多くの僕を送り、それでもダメで最後に自分の一人息子を送って収穫を受け取ろうとしました。中田神父は司祭召命、修道者召命のために、最後に残っているものさえも与えて収穫に手を貸しただろうか、もう一度考える必要があります。

成長させ、実を付けさせてくださる神に、全幅の信頼を置きましょう。私たちの手の中で思い描いている結果に縛られることなく、その先で神が結果を用意してくださると信頼しましょう。神に全幅の信頼を置く生き方こそが、蒔かれた種から結果を引き出す道なのですから。

年間第 12 主日(マルコ 4:35-41)

主日の福音 2024/6/23(No.1302)

年間第 12 主日（マルコ 4:35-41）

イエスは大事な場面で「向こう岸に渡ろう」と促す

イエスは弟子たちに「向こう岸に渡ろう」と言います。中田神父は「向こう岸に渡ろう」とだけ言っていることに注目しました。たとえば福江港から「向こう岸に渡ろう」とだけ言われたら、皆さんは戸惑うのではないでしょうか？一般的に考えれば、それは「久賀島に渡ろう」とか、「奈留島に渡ろう」とか、目的地があるはずです。しかしイエスは「向こう岸に渡ろう」とだけ告げています。

もちろん、向こう岸には「ゲラサ人の地方」があり、宣教するという目的もちゃんとあるのでしょうが、ここでは向こう岸に着いてからのことよりも、向こう岸に渡る中で経験することを強調していると考えられます。そのような見方で、今週の学びを得ることにしましょう。

幼い頃の話をさせてもらいます。私の父は、私が小学生の頃は遠洋漁業の巻き網船に乗る船員でした。鯛ノ浦港を母港に持つ船団で、一度だけですが船を見せてもらうために連れて行ってもらったことがあります。「フェリーひさか」ほどの大きさの船がずらりと停泊していました。小学生にとっては圧倒される光景でした。

父親が、「船に乗ってみるか」と誘ってくれたのですが、岸壁から船に渡していたのは幅 30 センチくらいの板一枚でした。父が先に渡って、船から私に「こちらに来い」と言うのです。とてもではありませんが、狭い板の上を渡って行けそうにありませんでした。

見かねた父が私の所に戻ってきて、私を抱きかかえて船に乗せてくれました。そのとき板がゆさゆさ揺れたのは今でも覚えています。あの時狭い板を渡ったことは、のちに大いに役に立ちました。父が亡くなった後に赴任した浜串小教区で新船の祝福をしたとき、同じ幅の板を渡りましたが、幼いときの経験が無ければきっと渡れなかったでしょう。

福音に戻りましょう。イエスが弟子たちに「向こう岸に渡ろう」と呼びかけたとき、渡るまでの間に何が起こるか、イエスは十分理解していたと思います。突風が吹き、舟が水浸しになります。何も手を打たなければ、海の藻屑となって消えてしまうでしょう。イエスは艫の方で枕をして眠っています。御父への深い信頼を見せようとしたのでしょう。

弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」（4・38）と叫びました。イエスが見せた御父への深い信頼は、弟子たちには伝わってなかったのです。しかし、イエス様と弟子たちが乗ったこの舟は、「向こう岸」に渡ることになります。

「向こう岸に渡る」とは、単に「ゲラサ人の住む地方に着いた」という意味だったのでしょうか。そうではありません。「イエスと一緒に乗った舟は必ず目的地へたどり着く」その経験を積むことを意味していました。イエスと一緒の舟に乗り、向こう岸に渡るとき、自分を見失うほどの恐れを感じる中でも、必ず目的地にたどり着かせてくれるのです。

小学生の時、狭い板を見て、これではどれだけ父親が渡ってきなさ

いと言っても渡れないと感じました。父親への深い信頼が無かったからです。当時の父親の年齢を超えて、今なら分かります。深い信頼が、渡れないと思った向こう岸へと人を渡らせてくれるのです。

人への信頼がそうであるなら、父なる神とイエス・キリストへの深い信頼はなおさらです。神への深い信頼は、人を憎しみから愛のあるところに渡らせてくださいます。争いから和解へと渡らせてくださいます。絶望から希望へ、悲しみから喜びへ、暗闇から光へと渡らせてくださるのです。

イエスの「向こう岸に渡ろう」という呼びかけを聞いて、私たち長崎教区民は、具体的に何を思い浮かべたら良いでしょうか。いろいろあると思いますが、たとえばそれは、「小教区再編」の動きだと思います。人間の考えだけでは「わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と叫びたくなります。

けれども乗りかかったこの舟は、イエスと一緒に乗る舟です。必ず、目的地へたどり着くのです。司祭・信徒・修道者が一同に集まって、「向こう岸に渡ろう」と呼びかけるイエスに深い信頼を寄せましょう。その時初めて、次の段階に移って宣教・司牧が続いていくのです。

年間第 13 主日(マルコ 5:21-43)

主日の福音 2024/6/30(No.1303)

年間第 13 主日（マルコ 5:21-43）

イエスは必ずご自身との真の出会いに導く

私は日曜日のミサ後、信者さんからスータンの裾を掴まれたことがあります。その日の福音朗読が今週の「ヤイロの娘とイエスの服に触れる女」でして、二つがおり混ざった奇跡物語でした。スータンを掴んだ高齢の女性は、私を通してイエスに触れ、救いの体験を味わいたいと思ったのでしょう。当時の説教を少し練り直してお届けします。

二つの物語のうち、十二年間出血の止まらない女性は、「この方の服にでも触れればいやしていただける」（5・28）と考えてイエスに近づき、服に触れると確かに出血は止まりました。この女性にとっての目的は十分果たされたのですが、イエスはその女性を探しています。女性にとっての目的は果たされていても、イエスがその人に積ませたい体験は、まだ終わっていないからです。

女性が勇気を出して名乗ると、イエスから声をかけてもらいます。イエスと出会い、イエスを信じる人になること。それが女性に積ませたい体験でした。イエスとの出会いが信仰に変わり、「救われた」と実感して生きていく。奇跡の先で、この体験を女性は積んだのです。

会堂長ヤイロは、きっとその光景を目に焼き付けたでしょう。すでにイエスを信じ始めていましたが、試練を受けます。会堂長の家から人が来て、人間的な希望を断ち切られてしまうのです。「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう」（5・35）。

娘が回復することがイエスに近づいた目的ですから、ヤイロはイエスに期待することは何もありません。そんなヤイロにイエスは「恐れることはない。ただ信じなさい」（5・36）と言います。イエスにとって、ヤイロに積ませたい体験はまだ終わっていないからです。

「なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ。」（5・39）人々はイエスをあざ笑います。これも会堂長ヤイロにとって試練です。この先もイエスを信じ続けることができるだろうか。迷いやためらいが生じても不思議ではありません。

そんな中でもイエスは娘を生き返らせ、父親に返してくださいました。ここでヤイロは自分が最初に持っていた目的にたどり着いたのですから、物語は終わりでしょうか。それだけでは終わりません。会堂長ヤイロは、娘の回復という目的のその向こうに、たどり着きます。イエスとの出会いが信仰に変わり、「救われた」と実感してこれから生きていく。その体験をヤイロは積んだのです。

イエスはすべての人に、同じ体験を積ませようと考えておられます。イエスの服に触れ、いやされるだけの出会いではなく、自分の娘を返してもらうだけの出会いでもなく、イエスとの出会いが信仰に変わり、「救われた」と実感してこれから生きていく。この体験をすべての人に与えようとされるのです。

私の父は肺がんで亡くなりました。71 歳でした。担当した医師はカ

トリック信者でした。家族は「余命半年でしょう」と告知を受け、その通り半年で旅立っていきました。闘病中、どのような精神状態だったか知るよしもありませんが、主治医に父は「自分は神様を信じているから何も怖くない」と伝えたそうです。実際にはそれだけではなかったと思いますが、根底にある覚悟は揺らぐことはなかったのでしょう。

　私なら「半年です」と医者に言われても受け入れられず、食ってかかるでしょう。しかし父は、自分のことだけ考えていたのではなく、司祭である息子のためにも、最後の教えを残そうとしていたのだと思います。「神様に出会ったのだから、恐れずに自分を委ねて旅立つ。」私は父親の最後の半年で、イエスと出会わせてもらった。そう思っています。

　長崎港の沖合にある伊王島の馬込教会から月に一度、有川の病院を訪ねました。刻々と状態が変化する中、私はついに一度も「父を取り上げないでください」とは祈りませんでした。「信仰の道から逸れないように、最期まで歩ませてください」その思いだけでした。

　5 月 31 日、父の命日が来ると、祭服を着ながら、イエスの服に触れているのだと考えています。服に触れるだけではありません。実際には救い主イエスに出会わせてもらっているのです。この境地に導いてくれた父には今でも感謝しています。

　イエスはすべての人に、「ご自身と出会って救われた」この体験を積ませようとしています。詰まるところそれが、人々に証しすることの出来る唯一の体験です。これまでの人生振り返って、人に証しできる救いの体験、信仰の体験に思い当たるでしょうか。

　イエスが、すべての人にこの体験を積ませようとしているのであれば、それは必ず見つかるし、必ず体験するのです。私たちは、人に証しするだけの救いの体験を積んで、宣教する人に必ずなれるのです。

年間第 14 主日(マルコ 6:1-6)

主日の福音 2024/7/7(No.1304)

年間第 14 主日（マルコ 6:1-6）

恵みの豊かさで驚きを与え続けてください

主任司祭と助祭の霊名のお祝いを用意してくださり、感謝申し上げます。私たちの霊名のお祝いは、「皆さんもどうぞ、それぞれの霊名をお祝いしてください」という「しるし」と考えてください。

そう言っても「誕生日すら家庭で祝えないのに、霊名のお祝いなど考えたことがない」そんな家庭もあるでしょう。それでもあえて、考えてくださいと呼びかけたいと思います。誕生日は、人として歩み始めた日を思い出すことができます。霊名の日は、「神の子どもとして」歩み始めたことを思い出すことができます。

もちろん、二つ祝うのは大変かもしれません。どちらか祝って二つとも思い出してはいかがでしょうか。冷めた見方をすれば、司祭たちの霊名の祝いは「あんな司祭が福江教会にいたなぁ」と思い出すきっかけかも知れません。霊名の日を思うためなら、理由は何でも構いません。

切実な理由で誕生日を祝えない方々もいます。この前指摘を受けました。現代では経済的な理由もあって記念日を祝えないのだと。今日、司祭と助祭のお祝いのために、小教区で予算を組んでもらっています。ありがたいことです。ただ、「祝う」「喜び合う」ということを突き詰めたら、お金をかけないで祝う、喜び合うこともできるはずです。

いちばんお金をかけないで、誕生日と霊名のお祝いを祝う方法を教えましょう。その日にミサに行くことです。ミサに行って、誕生日・霊名の日の祝福を神様に願う。早起きさえすれば、お金はかかりません。ぜひお勧めします。洗礼を受けて神様の子どもとしていただいた場所に行く。誕生日にもミサに行く。これは最高の祝い方だと思います。

洗礼の恵み、結婚の恵み、さまざまな召命の恵み。教会を通して神様からいただいたものがあります。それらが自分にとってどんな意味があるのか、答えが与えられるまで考える人であってほしいです。福音朗読ではイエスが故郷の会堂で教えておられます。当時は旧約聖書が神から与えられた賜物でした。イエスは聖書について、律法について、深く教えてくださっていたでしょう。

もっと言うと、イエスご自身が、当時の人々に与えられた神からの賜物でした。イエスは身をもって、そのことを教えようとしました。しかし故郷の人々は、自分たちがすでに知っていることの中に、神から与えられた賜物であるイエスを押し込めて理解しようとしたのです。「この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。姉妹たちは、ここで我々と一緒に住んでいるではないか。」（6・3）

「この人が授かった知恵と、その手で行われるこのような奇跡はいったい何か。」（6・2）郷里の人々は答えが与えられるまで思い巡らし、深く掘り下げるべきでしたが、そこまでの忍耐心も、イエスへの敬意も持っていませんでした。今風に言えば、郷里の人々はイエスを「上から

目線」で見ていたので、正しく理解できなかったのです。

私の身近な先輩に、「自分は奇跡を信じている。私自身司祭になれたことが、イエス様の奇跡だ」と言う方がいます。言いにくいことですが、中田神父はこの先輩のことを上から目線で見ていました。奇跡は、上から目線でしか見ていなかった私にではなく、誰よりも苦労したこの先輩の上に起こったのでした。

私と、この先輩はいろんな地区で一緒に働きました。神学生の時だけでなく、どの地区に行っても苦労させられていました。誰よりも苦労したので、受けた恵みを誰よりも思い巡らし、掘り下げてきたと思います。ですから、みずからの上に起こった驚くべきわざを、誰よりも感謝できるのだと思います。

今になって私は、この先輩を上から目線で見ていたことがとんでもない間違いであったこと、そのためにどれだけ私自身成長するチャンスを無駄にしてきたかを思い知らされています。

しかし時間は残されています。私たちが神からいただいた恵みがどんなにすばらしいものであるか、考える時間はあります。この恵みが与えられていなかったら私はどうなっていただろうか。私たちはどうなっていただろうか。考える時間はあると思うのです。

神のわざを、自分たちがすでに知っていることの中に押し込めようとしたら、恵みの豊かさを台無しにしてしまいます。「十分に知っている。少なくともここにいる誰よりも知っている」そう思った瞬間に、私たちは神の恵みの豊かさを台無しにするのです。

神はいつも、その時代の人々を通して恵みの豊かさを証明してくださいます。今日も、恵みの豊かさを示して私たちに驚きを与えてください。ミサの中でこのように祈ってまいりましょう。

年間第 15 主日(マルコ 6:7-13)

主日の福音 2024/7/14(No.1305)

年間第 15 主日（マルコ 6:7-13）

神のことばの一節を持ち帰り、杖一本とする

「旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず・・・」（6・7）八年前、2016 年の１月下旬に、まれに見る大雪が降りました。私は上五島の浜串小教区にいましたが、本教会の浜串で７時のミサをした後、９時に巡回の福見教会でミサをしなければなりませんでした。

しかしすでに相当の雪が積もっており、車を出して山道を登るのは不可能でした。このままでは巡回教会のミサが出来なくなります。考えた挙げ句、ミサの時間を一時間遅らせて、歩いて巡回教会に向かうことにしました。この時、竹を切った杖を手に持って、片道一時間半歩いて出かけたのです。

浜串教会から峠を登り、いったん峠を降ります。そしてもう一つ峠を登って降ったところに福見教会があります。汗びっしょりになりながら司祭館で全身を拭き、身を整えてからミサをしました。

現代ですから、説教の原稿はスマホがあれば話すことは出来ます。文字通りの杖一本ではありませんでしたが、車に乗らず、ほとんど何も持たず、待っている信者のもとにミサをしに行ったのは忘れられない思い出です。

杖一本を持って出かける。イエス様時代のパレスチナで杖を持ち歩く人とは、旅をする人の姿だけでなく、一般的には羊飼いの姿なのでしょう。出かけた先に、杖を使って案内し、導く羊たちがいる。旅の途中に出会う危険な動物を追い払うだけでなく、その杖によって養う羊たちが目的地で待っています。そう考えて道を進むとき、たとえそれが困難な道であっても元気が出ます。

「杖」は、「あなたにわたしの羊を任せる」そのしるしとなります。食べ物や、施しを受ける袋や金銭は、イエスから派遣されたしるしにはなり得ません。待ち受ける人々は弟子たちの宣教する姿を自然と見極めます。神の国を告げ知らせる人がパンや袋や金銭を頼りにしていたら、人々から見切られてしまうでしょう。弟子たちは、羊を導くための「杖」に寄り頼んで宣教するので信頼されるのです。

弟子たちは、はっきりと「杖一本」持っていくように指示を受けました。皆さんはどうでしょうか。「杖一本」は難しいかも知れませんが、イエスから派遣された「しるし」これを拠り所に生活を組み立てることは可能です。特に、日曜日毎に朗読される聖書の一節を、今週の拠り所に持ち帰ろう。この積み重ねをしていけば、皆さんの生活も杖一本を手に、ミサから派遣されて生活に戻る人になれます。

場合によっては、福音朗読の一節ではなく、第一朗読や、第二朗読の一節が心に残って、一週間を組み立てる土台にできるかも知れません。13 日土曜日の朝、第一朗読はイザヤ書でした。最後の部分で「誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行くだろうか。」わたしは言った。「わ

たしがここにおります。わたしを遣わしてください。」という対話がありました。とても印象に残りました。第一朗読、第二朗読は、皆さんが読むわけですから、心に残る可能性は十分あります。

神のことばの一節を、生活に派遣される者として持ち帰りましょう。あなたの生活で信仰を表していく頼みの道具として、ミサで「行きましょう」と派遣された「しるし」として、神のことばはふさわしいと思います。今週は、どの一節を持ち帰りますか？どの一節が、あなたの一週間を助けてくれると感じるでしょうか。

年間第 16 主日(マルコ 6:30-34)

主日の福音 2024/7/21(No.1306)

年間第 16 主日（マルコ 6:30-34）

良い休みを学ぶとよく働き、人に良い休みを与える

「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい。」（6・31）私は、このイエスの言葉が、弟子たちに対する深い思いやりとして映りました。何らかの形で人を雇っている立場にある人々にとって、学ぶことの多い態度だなと思ったのです。

イエスが弟子たちに「休みなさい」と言っている今週の朗読箇所は、小教区で人を雇ったり、協力者を募る立場になってようやく自分のこととして受けとめることが出来るようになりました。弟子たちに配慮するイエスの姿はつねに主任司祭のお手本です。

最高の模範があるにもかかわらず、私は雇っている人々にとって良い雇い主とは言えないと思います。協力者に対しても、良い責任者ではないと痛感します。未だに、人が人のために働いているということを、十分理解していないからです。

かつて、２人の主任司祭のもとで教会の務めを学びました。雇っている人、協力者への接し方も見て学びました。当時は 20 代後半から 30 代に入るという本当に若い時期でしたので、人が人のもとで働いていることについてほとんど理解していなかったと思います。

一方で、ある部分では雇われている身でもあります。主任司祭としてくださっているのは大司教様です。大司教様に任命された場所で務めを果たします。若い頃よりも今の方が、大司教様の期待に応えたいと考えるようになりましたし、大司教様がどんな気持ちで任地を決めて、私たちを働かせているのかなぁということも考えるようになりました。

そこであらためて思い返すのです。「しばらく休むがよい。」私は、イエスのような配慮を、雇っている人に持っているのだろうか。協力を仰いでいる人に、イエスのような温かい思いやりを掛けているのだろうか。むしろ配慮にも思いやりにも、足りない面があるのではないかと思うことばかりです。

子どもたち、また学生たちは夏休みに入りました。夏休みにも、今日のイエスの呼びかけを当てはめて考えることができます。「さあ、夏休みだ。しばらく休みなさい。」やってきた休みを何となく過ごすのではなく、イエスが休みなさいと言っているのだと考えるわけです。そのことで、休みは次の学期への準備をさせてくれるはずです。

私の主任神父様になってくれた２人の神父様は、次によく働くために休みを取るということを上手に実行していたと思います。神父様自身のためだけではなくて、主任神父様のもとで働く司祭にも、「良く休んで良く働く」ということを実践しておられたと感じました。

イエスは弟子たちにはしっかりした休みを取らせつつ、押し寄せてくる群衆には「飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた」（6・34）となっています。責任者が、態度で弟子たちを教え育てています。まず休みなさい。しっかり休んだら、私がして

いることをあなたがたもしなさい。導きが必要な人々がまだまだたくさんいるから、いろいろと教えてあげなさい。そんなふうに、イエスはご自分の働きぶりで教えてくださっています。

　私たちは皆、イエスから「休みなさい」と声をかけてもらう必要があると思います。イエスが私たちにくださる休みの中で、私たちは次に備える時間を持ちます。イエスが用意した場所で休むなら、その休みは本来の姿にどのように向き合うべきかを考える良い機会になるはずです。

　もっと、雇われている人の気持ちに寄り添って「休みなさい」と声を掛けてあげられる人でありたいと思いました。そして、休みから帰ってきたら、また気持ちを込めて働く人へと育ててあげる必要にも気づきました。

年間第 17 主日(ヨハネ 6:1-15)

主日の福音 2024/7/28(No.1307)

年間第 17 主日（ヨハネ 6:1-15）

あなたがいてくだされば、絶望の中でも希望を持てます

（訳あって、2009 年原稿を再掲）今週は、ヨハネ福音書による「五千人に食べ物を与える」という奇跡の物語で、四つの福音書ともに出来事を残しているわけですが、他の福音書の書き方とはっきり違いを見せています。共観福音書では、パンの奇跡が行われた場所は「人里離れた場所」とされていますが、ヨハネは出来事が山でおこなわれたとしています。

この「山」という表現ですが、かつて山で行われた出来事と、今回の出来事を重ねて考えてみなさいと言いたくて、「山」という場所を用いているようです。

「かつて山で行われた偉大な出来事」とは何でしょう。イスラエル人が真っ先に考えるのは「十戒の出来事」でしょう。神はモーセを通じてイスラエルの民に十戒を授けました。民はこれを守り、それによって神が民を守り、救うというものです。

ですから、イエスが五千人に食べ物を与えるという奇跡を「山」でおこなったという書き方をヨハネがしているのは、かつての山での出来事を思い出しなさい。神が十戒を与えて民を守り、救うと約束したように、今イエスも、あなたたちを守り、救う約束としてパンを与えているのですと言いたいのです。

ヨハネが描くパンの奇跡に見えるもう一つの特徴は、この出来事を「しるし」として示している点です。パンを食べさせてくれたのは、かつて十戒を授けてくれた神に私たちの目を向かわせたように、イエスもまた、神の子として私たちの救いのためにこの偉大な出来事をなさったのだと気づいて、神をたたえるべきだったのです。

ところが、群衆が取った行動は、イエスをこの世の王に仕立てようとする態度でした。この世の王は、人々を支配する存在です。救いを与えるのではなく、支配のもとに人々を置くに過ぎません。支配ではなく、神に守られ、愛されている喜びを持ちながら生きるために、奇跡をしるしとして用いたのです。

さて、このようなヨハネの理解を踏まえて、パンの奇跡の出来事をふり返ってみましょう。イエスは、フィリポに尋ねます。「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか。」（6・5）イエスはひとまずそばにいた弟子に尋ねています。弟子に何かを気づかせるためにほかなりません。

フィリポは置かれている状況が絶望的であることには気づいたようです。「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう。」（6・7）シモン・ペトロの兄弟アンデレも、何かはあるけれども、何かがあるだけで何の役にも立たないだろうと決めてかかっています。「ここに大麦のパン五つと魚二匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、何の役にも立たない

でしょう。」（6・10）
　この状況は、きっと私たちの状況を指しているのだと思います。さまざまなことが、希望の持てない状況です。そこへ、イエスは見落としている大切なことを指摘します。絶望的な状況だけれども、わたしがそばにいるのを忘れてはいないか。何の役にも立たないくらいしか手持ちがないけれども、その役に立たないほどわずかのものを活かすことのできるわたしがいるではないか。そのことをイエスは、当時の弟子たちにも、私たちにも言いたいのではないでしょうか。
　私たちは、イエスが示す奇跡をきちんとしるしとして読んでいるでしょうか。私が抱えていた絶望的な気分は、イエスがそばにいることを忘れていたことで生じていたのではないでしょうか。イエスは今も、私たちに「この絶望的な状況を、どうしたら打開できるだろうか」となぞかけをしているのではないかと思っています。
　それに対して「もちろん、あなたがそばにいてくだされば、きっと解決できます」と答える準備をしておきましょう。その答えを、イエスは今か今かと待っておられるのではないでしょうか。

年間第 18 主日(ヨハネ 6:24-35)

主日の福音 2024/8/4(No.1308)

年間第 18 主日（ヨハネ 6:24-35）

イエスは必要なときに必要なパンを与えてくださる

約一週間、体調不良でお休みしておりました。ご心配をおかけして申し訳ありません。助任司祭は今回司祭生活でいちばん働かされた一週間だったと思います。大変だったと思いますが、どこかで「これ以上無いくらいきつかった」という体験をすると、大きく成長すると思います。

今年の小教区黙想会で主任司祭から、「聖書の一節を自己紹介に使ってみてはいかがでしょうか」と話したのを皆さんは覚えているでしょうか。黙想会のテーマは「廃止するためではなく、完成するためである」（マタイ 5・17）でした。中田神父は自己紹介に「『廃止するためではなく、完成するためである』を自分の生涯の目標として働こうと思っています」、そういうふうに説明しました。

イエス様のみことばの一節を大切にして信仰生活をあゆむ方法は大いに勧められるのですが、その中ではこの一節は大変難しい生き方かも知れません。「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。」（6・27）ほとんどの人が、望んでそうしているわけではなくても、「朽ちる食べ物のため」働いていると思うからです。

上五島で、言い伝えになっている話があります。島の東側と西側にそれぞれ集落が広がっているのですが、その一つに奈良尾と桐という二つの集落があります。そしてこの二つの集落の特徴を私はこう言い聞かされていました。「奈良尾は稼ぐために働くが、桐は勉強させる為に働く」イエス様の「朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないもののために働く」これに通じるのではないかと思います。

ご存知のように、桐教会からは何人もの司祭を輩出し、一人は司教様になりました。単純な比較をしてはいけないと十分分かっていますが、いつまでもなくならないもののために投資した結果が、このような形になったのではないかと考えています。

イエス様の示す生き方「道」は、いつも「朽ちる食べ物」ではなく「永遠の命に至る食べ物」でした。この世の物差しで計るなら、それはほとんど恩恵をもたらさないかも知れません。しかし、イエス様が示されたものを受けて食べた人は、それによってもたらされた結果を永遠に失わないのです。

中田神父も一週間のうち最初の三日間はベッドからほとんど動けませんでしたが、初金曜日にはベッドからほとんど動けない人に病人訪問で御聖体を運んでいたことをあらためて考え直すことができました。症状の重い期間を体験しなかったときは「元気な人が病気の人を見舞う」この形でしたが、これから 10 年 20 年は、「ほとんど動けない経験をした後に病気の人を見舞う」という形に変わります。御聖体を受ける人を思う気持ちは全く違うと思うのです。

イエス様ははっきりと仰いました。「わたしが命のパンである。わ

たしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渇くことがない。」（6・35）イエス様から示されたものを、謙虚に受け、それをパンとして食べるとき、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る糧に変わるのです。

　ただし、イエスが示されるパンの形を、私たちが選ぶことは出来ません。そこは注意が必要です。それが癒やしの奇跡を与えている姿であるか、最後の晩餐で弟子たちに配られるパンとぶどう酒の姿であるか、あるいは十字架上で命をささげている姿であるか、私たちは選べません。「これをどうやって食べろというのですか？」と疑うのではなく、「あなたが示されるもの、それを私はパンとして頂きましょう」そのような受けとめかたができるように私の心を準備しましょう。

　今週は広島原爆の日、長崎原爆の日を迎えます。現在広島教区には上五島仲知小教区米山教会出身の白浜満司教様がおられます。白浜司教様のモットーは参考になると思います。モットーは「福音のためならどんなことでも」でした。

　私たちも同じように、「イエスが与えてくださるものなら何でも受け取ります」そう心に決めましょう。どの場面のイエスであっても、それは私たちに必要なものを与えてくれる命のパンなのです。

年間第 19 主日(ヨハネ 6:41-51)

主日の福音 2024/8/11(No.1309)

年間第 19 主日（ヨハネ 6:41-51）

あなたの手は命のパンを受け取る形になっているか

８月、危険な暑さが続いています。下五島の教会は、エアコンの付いている教会とそうでない教会とあります。それぞれ事情があってのことでしょうが、身を守るために主任司祭のいる教会はエアコンを設置してくれたらと願います。

何かを手にする時、先を争って手にしようとする場合と、順番にいただいたりする場合とでは、手の出し方が違うと思います。先を争って手を出す時は、手の甲を上にして、上から掴もうとするはずです。順番に並んでいてももらえないかもしれない場合は、それも仕方の無いことかも知れません。

一方、順番に何かを手にする時、それは配られたもの、並んでさえいれば受け取れるものでしょうから、手の甲は下に、手のひらを上にして受け取るはずです。手の甲を上にするか、手のひらを上にするか。あらためて考えてみると面白いと思いませんか？

ここで尋ねたいことがあります。今あなたが手にしようとしているものは、手の甲を上にして掴みと取ろうとするものですか、手のひらを上にして、大切にいただこうとするものですか、どちらですか？ということです。

今週の福音朗読で、イエスははっきりと「わたしは命のパンである」（6・48）とおっしゃいました。ここで先ほど考えたことを当てはめてみましょう。命のパンであるイエス様を手に入れるのに、あなたは先を争うように手の甲を上にして手を伸ばし、掴み取ろうとするのでしょうか。それとも手のひらを上にして、与えられるその時を待っていただくのでしょうか。どちらでしょうか。

これはまさに私たちが聖体拝領をするときの動作です。司祭が「キリストのおんからだ」と言って聖体を授けます。私たちはどのように手を準備するのでしょうか。先を争って掴み取る手の出し方ですか？そうではないでしょう。もし手の甲を上にして掴み取ろうとするなら、中田神父はその人がカトリックの洗礼を受けた聖体拝領の準備のできている人かを不安に思うかも知れません。

興味深いと思いませんか？聖体を頂くみなさんの手の形が、私たちに命のパンであるイエス様との向き合い方を教えてくれているのです。私たちが命のパンにあずかるためには、順番を待つ人のように、心を整えておく必要があるのです。もっと言うと、命のパンが手のひらに授けられるその時をじっと待つ。そんな心構えが必要なのだと思います。

残念ながら、福音朗読に登場する群衆は、手を伸ばし、手の甲を上にして、先を争って掴み取ろうとする人たちになっていました。手の甲を上にして争って集まる人たちからは、命のパンであるイエスはこぼれ落ちていくのです。

神の恵みを待ち望む時。祈りに答えてくれる神に信頼して顔を上げ

る時。照らしを求めている時。苦しみの意味を教えてくださいと願っている時。あらゆる時に私たちは手のひらを上にして、手の甲を下にしていなければ、恵を受け取り損ねてしまいます。

　私たちはこれまで、命のパンをいただくためにイエスとどんな向き合い方をしてきたでしょうか。身近なところでは聖母マリアが私たちの模範です。聖母被昇天のミサで、そのことに少し触れてみたいと思います。

　私たちの手は、命のパンを感謝して受け取る手の形になっているでしょうか。恵みをいただくにふさわしい心が準備できるよう、主に照らしを願い、ミサを続けてまいりましょう。

聖母の被昇天(ルカ 1:39-56)

主日の福音 2024/8/15(No.1310)

聖母の被昇天（ルカ 1:39-56）

神が示されたすべてを受け取ったマリアは天に上げられた

年間第 19 主日で、命のパンを受け取る手の形は、手のひらを上にして、授けてもらう・頂くという手の形でないと受け取れませんよ、と話しました。私は聖母被昇天の今日、マリアが神を賛美した言葉の中にもそのことを見つけました。

朗読でマリアは神をたたえて、「主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。」（1・51-53）と言いました。

神が力を振るうとき、きっとそれは手の甲を上にして力を振るうでしょう。思い上がる者を打ち散らす、権力ある者を引き降ろす、富める者を空腹のまま追い返す、こうした力を振るうときにも、手の甲を上にしてなさるのだと思います。

一方で、身分の低い者を高く上げる、飢えた人を良い物で満たす、こうした働きのために神は手のひらを上にして人々に近づいてくださるのです。先週のミサで説教をしたとき、すでに聖母被昇天の朗読箇所との繋がりを考えていたわけではないのですが、びっくりするほどうまく結び付きました。神様のなさることは、「時」に叶っていると思います。

賛美の歌を唱えたマリアは、小さくされた人の代表です。何よりご自身が、神に対して手のひらを上にして、差し出されたものを受け取る生涯を貫きました。幼子イエスを神殿に奉献したとき、幼子を抱く手のひらは上を向いていたはずです。

シメオンの預言には、目を背けたくなるような未来も含まれていました。「あなた自身も剣で心を刺し貫かれます――多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」（ルカ 2・35）それでも、マリア様の手は、示されたものをそのまま受け取る手の形を変えなかったのです。

また少年イエスと共に神殿礼拝に出かけ、わが子を見失って心配したときも、すべての出来事を心に納め、思い巡らしました。心に納めるための手の形も、きっと手のひらを上にしていたでしょう。それは、シメオンの預言が実現し、十字架の上でイエスがお亡くなりになったときも、変わらぬ姿でした。

マリア様は生涯を、神が示されたものをすべて受けとめる、手のひらを上にして頂く、その生涯を貫かれました。神が示されたものをすべて受け取る生き方を貫いたマリア様を、その体も魂も、天の栄光にあげてくださることは、ふさわしいことだと思います。

天に上げられたマリアは、「わたしの生き方に倣いなさい」と、私たちを手を開いて招いています。私たちは子供のようになって、マリアを慕ってここに集まっています。その手のひらはきっと、天に向けて開かれた手のはずです。

出来れば今日一日は、マリアの生涯を賛美するために、マリアの生き方を最高の栄誉で満たしてくださった神様を賛美するために、手を開いて、手を天に向けて差し出して、過ごしたいものです。

主日の福音 2024/8/18(No.1311)

年間第 20 主日（ヨハネ 6:51-58）

私たちは生涯かけて命のパンを消化していく

昔の先輩司祭は、結論だけを若い司祭に伝える方々が多かったと思います。中田神父がお仕えした主任司祭は、「これから 25 年は働いてもらわないと、元は取れない。しっかり働いてくれ」と念押しされました。ほかにも、じわじわ効いてくる教えをいくつも受けました。

25 年と一口に言っても、紆余曲折有るわけです。「こんなこと、あんなこともあるよ」といった途中のことはお話しなさらず、25 年黙って働いてくれ、言いたいことはその後で言ってくれという教育でした。その主任神父様は、私が銀祝を迎える頃には病状が進み、「25 年働きました。元を取りましたよ」という話をすることは叶いませんでした。

考えてみると、イエス様のことばも、ズバッと結論だけを言っているのかも知れません。「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。」（6・51）だからユダヤ人は「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」と、互いに激しく議論し始めたのでした。

ユダヤ人は、すぐに理解できる説明を求めました。しかし、イエスが全生涯をもって示そうとすることを、目先の説明で理解しようとするのは無理があります。イエスが「天から降って来た生きたパン」であることを、全生涯をもって証明しようとしている。そうであれば、今は理解できなくても、イエスに耳を傾け、イエスに従って歩み続ける必要があります。ユダヤ人はその覚悟を受け入れず、拒否しました。

結婚生活には銀婚式があり、奉献生活には銀祝があります。司祭も銀祝があります。それまでの間に起こることをすべて説明してもらったとして、では 25 年の年月は必要ないと果たして言えるでしょうか。

「わたしは、天から降って来た生きたパンである」とイエスが仰ったことを短時間で効率よく説明してもらったとしても、それで私には長い信仰生活は必要なくなる、イエスを信じるのに長い年月など必要ないと、果たして言えるでしょうか？

無知な発言をした当時の私に、最初の主任神父様が言い残してくださった戒めを、私は決して忘れません。「お前なぁ。60（歳）にならんと言えんこともあるとぞ。」新米司祭でも、言いたいことがあればどんな発言も可能でしょう。しかし、長い年月が与えてくれた言葉は、年月によって重みが与えられ、その年齢にならないと意味を持たないのです。

イエスは、今も私たちを招いています。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。」（6・56）命のパンを受ける私たちの内に、いつも主イエスがいてくださいますように。毎週の福音朗読を読み込んで準備した説教の中に、主イエスがいてくださいますように。私たちの言葉や行いは拙くとも、その中に主イエスがいてくださるなら、私たちの言葉や行いは決して無駄ではないのです。

年間第 21 主日(ヨハネ 6:60-69)

主日の福音 2024/8/25(No.1312)

年間第 21 主日（ヨハネ 6:60-69）

信仰に上限を付けると「ひどい話」に聞こえる

「種を蒔く人」のたとえをご存知でしょう。ルカの８章にありますが、たとえを説明するくだりの 13 節に「石地のものとは、御言葉を聞くと喜んで受け入れるが、根がないので、しばらくは信じても、試練に遭うと身を引いてしまう人たちのことである」とあります。

試練は、私たちの信仰がどこまで成長しているのかを確かめる機会となります。イエスを信じる信仰は、中田神父の考えでは「どこまでもイエスのことばと行いに従うこと」だと理解していますが、信仰がそこまで成長していない人の場合、「これ以上は信じられない、これ以上はついていけない」と、見切りを付けてしまいます。

イエスに従い始めた人々の中には、そうやってイエスに見切りを付け、離れていく人々が現れ始めていました。「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか。」（6・60）離れていく弟子たちとは、イエスのことばに自分たちの方から見切りを付けた人たちです。本当はイエスの進む道に最後まで従うことが正しいのに、正しさを貫くことが出来ませんでした。

試練は、現代の教会でも当然起こります。教会活動を続けていくために、礼拝のための聖堂は欠かせませんが、建物ですから年数が経つと当然手を入れる必要があります。更に年数が経てば、建て替えの必要も出てくるでしょう。

しかし、耐震補強や教会建設で積み立てが必要になると、なぜか一定数の人々は背を向けてしまいます。あからさまに転出する人々も出てきます。残念なことですが、自分たちで自分たちの教会を続けていくために協力しあいましょうと呼びかけると、身を引いてしまう人々がいるのです。ただ不思議と、補強工事や教会建設が終わると戻ってきます。

その教会にとどまって耐震補強や教会建設に協力してくれる人々は、それが「必要だと信じ、必要だと知っている」人々です。イエスがパンを取り、割いて弟子たちにお与えになった。杯も同じようにして分けてくださった。そのために今の建物に手を加えたり、新しく建て直したりすることを「必要だと信じ、必要だと知っている」これは、現代にあって最後までイエスへの信仰に従う中での試練だと思います。

イエスへの信仰は、試練によって鍛えられます。ペトロの手紙に次のように書かれています。「あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊くて、イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れとをもたらすのです。」（一ペトロ 1・7）

イエスに最後まで従っていく弟子たちの言葉にもう一度耳を傾けましょう。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」（6・68-69）

今では懐かしさすら覚えますが、私たちの信仰もこうでありたいものです。イエスへの信仰は、「ここまでは信じるけれどもこれ以上は信じることができない」というものではなく、試練の中で「信じます」と繰り返すことで磨かれていくのです。

年間第 22 主日(マルコ 7:1-8,14-15,21-23)

主日の福音 2024/9/1(No.1313)

年間第 22 主日（マルコ 7:1-8,14-15,21-23）

イエスは私の心に飛び込んできて照らしを与える

８月 31 日は、フランシスコ・ザビエル島本要大司教様の命日でした。中田神父は助祭叙階・司祭叙階ともに島本大司教様によって秘跡の恵みを授けていただきました。今でも思い出しますが、司祭叙階の場面でリハーサルに無いことが起こりました。

前日に、私を含め司祭叙階候補者の三人は入念なリハーサルを受けていました。もしも当日、リハーサルと寸分違わず叙階式が行われていたなら、のちに記憶は「リハーサルの通りだった」と置き換えられていたかも知れません。実際はそうはなりませんでした。

大司教様が次のように問いかけました。「わたしとわたしの後継者に、尊敬と従順を約束しますか。」もちろん私たちは、リハーサルの通り「約束いたします」と答えるわけです。すると島本大司教様は私たちだけに聞こえる声で「そうか。ありがとう」と言ってくださったのです。大司教様の前でずっと緊張していた私たちに、大司教様自らが飛び込んできてくれたような瞬間でした。

人の心に入っていくというのは、決して簡単なことではありません。初対面の人と話しをしている時や、初対面の電話など、私たちは相手の人の本心を探ろうとしていることがあります。様子を伺っているので、心を開くことができないわけです。それは社会の中だけでなく、教会の中でもそうでしょう。

そこで、もっとお互いを理解するためには、どちらかが相手の心に飛び込む必要があるわけです。島本大司教様は叙階の秘跡を受けようとしている私たち三人に、私たちから飛び込むことは難しいので、ご自身のほうから飛び込んできてくださいました。

どんな人に対してであっても、自分の方から相手の心に飛び込むほうが、より早く理解し合えると思います。ただその方法は相手によってさまざまかも知れません。固く心を閉ざしている人、耳を傾けようとしない人に対しては、時には相手の心の扉を打ち壊して飛び込まなければならない場合もあるでしょう。

それが、今週の朗読のファリサイ派の人々と律法学者たちでした。彼らは自分たちのしていることが正しいと信じ切って、心の扉を閉ざしていました。昔の人の言い伝えを固く守る。ほかの道で正しい生き方を示そうとする人が現れても、決して心を開こうとしなかったのです。

こうなると、イエスが正しい道についてまことの光で照らそうとしても、彼らの心に光は届きません。そこでイエスは、少々乱暴な手段ですが、彼ら宗教指導者たちの心の扉を打ち壊して、心を照らす光を届けようとしたのでした。

宗教指導者たちを納得させるためには単なる言葉ではなく、彼らが拠り所としている律法と預言者の言葉が必要だったので、イザヤの預言（29・13）を引用して、心の扉を壊しました。ただし、イエスが心に飛

び込んできてくれたことを歓迎できるかどうかは別の問題です。

ときおり、特別な才能の持ち主と出会うことがあります。心の扉を閉じている時に、まるで扉が存在しないかのように飛び込んでくる人です。自分では閉ざした心を開けずにいる。それを通り抜けてきた。その人は、イエスが私に遣わしてくれた人かも知れません。

「外から人の体に入るもので人を汚すことができるものは何もなく、人の中から出て来るものが、人を汚すのである」（7・15）とイエスは仰います。イエスはいつか、そのような人と出会わせてくださって、その人の向こうにおられるイエスにつねに心を開いておくように招いているのです。イエスにつねに心の扉を開いている人は幸いです。

年間第 23 主日(マルコ 7:31-37)

主日の福音 2024/9/8(No.1314)

年間第 23 主日（マルコ 7:31-37）

今も、命をもたらす声が聞こえない人がいる

先週、中学二年生「堅信クラス」の親子に、「堅信を受ける中学生と保護者の心構え」についての話を、クラス担当の洪助祭にお願いされて話しました。基本的なことを話したわけですが、久しぶりに勢いのある中学生と向き合う機会になりました。

話の内容は「こうじ神父」という YouTube チャンネルを見てくれるとありがたいですが、こんなオジサンの話をまともに聞くだろうかと半信半疑でしたが、意外と真剣に話を聞いてくれていたと思います。

反抗心も対抗心も、すべてを含め、中学生からの真剣なまなざしを感じて、柄にもなく途中からは力を込めて話していました。私を「道具」に、イエス様が中学生に向けて「エッファタ」「開け」と呼びかけていたのだろうと思います。

イエス様が「エッファタ」「開け」とおっしゃるとき、それはどこに向かって開けと命じているのでしょうか。身の回りの音に向けて開けと言っているのでしょうか？たとえば、自分の家でくつろいでいるとき、さまざまな音がそこにあると思います。

テレビの放送の音。テレビで放送されていない情報を得るためにラジオを流していることもあるでしょう。親子でリビングにいれば、子どもたちは自分だけが見たいものを見ようとして YouTube に耳を傾けているかも知れません。たくさんの音が、同時に聞こえている。家族でない人がそこに居たら、どの音に耳を傾けたら良いのか分からないくらいです。

情報は溢れかえっています。どの情報も、それなりに有益です。ただほとんどの情報が、聞かなかったとしても命に関わる問題ではないはずです。それに比べて、イエスが「エッファタ」「開け」と言って届けようとする声は、命に関わる大切な声なのです。

命に関わるもの。イエスは私たちに、「エッファタ」「開け」と叫んで、「命を得るために、わたしに耳を傾けなさい」と招きます。イエスが向けようとして開くのは、イエスの声、イエスの招きです。その招きに耳を傾けることが、私たちに求められているのです。

日々の生活で、イエスの招きに耳を傾けるためには、溢れかえっている音を遮断しなければならないこともあります。たくさんの音が溢れている部屋で電話を取ったなら、たいていの人はテレビの音を消したり、会話を控えたりして電話に集中するはずです。

皆さんの家庭で、イエスが「エッファタ」「開け」と招く声を聞くために、どれだけの音を遮断してくれているでしょうか。物理的にだけでなく、心の中で遮断して、イエスの招きがより良く聞こえるような努力をしたことがあるでしょうか。

イエス様が、「エッファタ」「開け」とおっしゃれば、たちまち耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すことができるようになります。

「神様の声なんか聞こえない」と決めてかかっている人がいるなら、いちど周りの音を全部遮断してみてください。全部の音を遮ったとき、ただ一つの声「エッファタ」「開け」というイエスの声に触れるのです。

　そしてイエスは心に届いた声を、誰かに届けてほしいと願っています。それは聞こえない声が聞こえたという怪しい魔術ではなく、本当に必要な声を聞いたという体験です。聞き逃しても命に関わるほどではない情報ではなく、命を養うまことの食べ物、飲み物を与えてくださる声です。私たちは今日、ミサに集まってこの声を聞いたのです。

　今の時代にも、イエス様の働きは続いています。イエス様は私たちを使って、命をもたらす声が聞こえず、その声の主について語ったことのない人をいやそうとしておられるのです。私たちが良い道具となって、だれかに「エッファタ」「開け」と働きかけるとき、イエス様の働きはいつの時代にも実を結ぶのです。

◆耳が聞こえず舌の回らない人をいやす
7:31 それからまた、イエスはティルスの地方を去り、シドンを経てデカ
ポリス地方を通り抜け、ガリラヤ湖へやって来られた。
7:32 人々は耳が聞こえず舌の回らない人を連れて来て、その上に手を置
いてくださるようにと願った。
7:33 そこで、イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出し、指をその両
耳に差し入れ、それから唾をつけてその舌に触れられた。
7:34 そして、天を仰いで深く息をつき、その人に向かって、「エッファ
タ」と言われた。これは、「開け」という意味である。
7:35 すると、たちまち耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すこと
ができるようになった。
7:36 イエスは人々に、だれにもこのことを話してはいけない、と口止め
をされた。しかし、イエスが口止めをされればされるほど、人々はかえ
ってますます言い広めた。
7:37 そして、すっかり驚いて言った。「この方のなさったことはすべて、
すばらしい。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を
話せるようにしてくださる。」

年間第 24 主日(マルコ 8:27-35)

主日の福音 2024/9/15(No.1315)

年間第 24 主日（マルコ 8:27-35）

ためらわずに信仰を表しつつイエスへの心は柔軟に

言いにくいことを誰かが言ってあげる。そういう時があります。その場合、誰が言うのかですが、その場を代表する人が発言することになるでしょう。その中には、「年長者」という人々もいると思います。

中田神父は、下五島地区では二つの立場でその場を代表する人です。「年長者」と「地区長」です。たまたま年齢的にも、下五島地区で私がいちばん年上の司祭です。そして地区長です。何か発言を求められると、私に回ってくることがあります。

「年長者」という意味では、敬老者のお祝いを受ける対象の方は、本日のミサを代表する人かも知れません。信仰の点で年長者の方に「何か意見をください」とお願いされたとき、それは機会を与えられたのだと思って引き受けてくれたらありがたいです。

今日、福音朗読でペトロが信仰を表す場面が朗読されました。ペトロはおそらく、弟子たちの中で年長者だったと思います。弟子たちはイエス様から「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」（8・29）と問われたとき、何かの考えを持っていたでしょう。しかし、自分の考えが本当に十分な答えかどうか、自信が無かったのでしょう。

そこへ、ペトロが進んで返事をしました。ペトロは、自分は年長者だから、「言わないで済むなら黙っていよう」そういう考えではいけないと考えたと思います。自分が、弟子たちを代表して答える必要がある。そういう気持ちがあったのだと思います。

年長者が、「ここは私が」と考える理由は何でしょうか。自分の意見は長年の経験から来ているから立派な受け答えができると考えるからでしょうか。そうではなく、私の想像ですが、何かをためらうような年齢でなくなったからではないでしょうか。それぞれの立場で、もう折り返しを過ぎているから、自分の言葉に責任を持つのもそう長くはない。だから「ここは私が答えよう」と考えるのではないでしょうか。

「これを言ったら、この後の長い人生に重荷になるのではなかろうか。」そういう、余計な考えにとらわれないで、言うべきことが言えるのは年長者のすばらしい点です。ミサに参加している方々でためらわない年齢になった皆さん、ぜひこれからも教会のために、言っておきたいことは聞かせてほしいと思います。もし、「こういう形でお伝えしたい」ということがあれば、それも教えてほしいと思います。

ただし、一つだけ忘れてはいけないことがあります。「一寸先は闇」という諺を知っている、理解している皆さんだからこそですが、イエス様はその「一寸先」を歩いておられる方、知っておられる方です。イエスが打ち明けること、教えることは、私たちが決して理解できない「一寸先のこと」だと受けとめましょう。ですからイエスはいつも、正しい答えを持っておられ、私たちに正しい道を示してくださるのです。

私たちは「一寸先」が分からないにもかかわらず、イエスが示され

る道に不平不満をぶつけてしまいます。「なぜこういう結論になるのですか？納得できません。」ペトロも、イエス様の死と復活の予告に同意できませんでした。

　そこでお願いです。頑なになりがちな私の頭と心を、敬老の日を迎えるこの時期、イエス様に柔軟にしていただきましょう。私の頭と心は年々頑なになっていきます。「一寸先」「五分先」すら読めなくなってきました。そんな中、イエス様はつねに私たちの一歩先、半歩先を歩いておられる。そのことを信じて、自分を委ねていきたいと思います。

　もはや、何かを言うのにためらうような年齢ではない方々。言いたいことをはっきり述べて、同時にイエスの前では柔軟な人となりましょう。その姿を毎年見せてくださることが、敬老者の皆さんの毎年の目標だと思います。

◆ペトロ、信仰を言い表す

8:27 イエスは、弟子たちとフィリポ・カイサリア地方の方々の村にお出かけになった。その途中、弟子たちに、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と言われた。
8:28 弟子たちは言った。「『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『預言者の一人だ』と言う人もいます。」
8:29 そこでイエスがお尋ねになった。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「あなたは、メシアです。」
8:30 するとイエスは、御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒められた。

◆イエス、死と復活を予告する

8:31 それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。
8:32 しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。
8:33 イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」
8:34 それから、群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言われた。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。
8:35 自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。

主日の福音 2024/9/22(No.1316)

年間第 25 主日（マルコ 9:30-37）

全面的にイエスを受け入れますか、一部分ですか

「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」（9・37）イエス様に示された子供は、名前も分からないし、どんな性格なのかも描かれていません。「このような子供の一人を受け入れる」と言われて、人によっては「どのような子供ですか？」と問い返したくなります。どのように理解すれば良いのでしょうか。

一般的な特徴を考えてみましょう。子供は、大きな力を持っていません。重たい物も持てないでしょうし、高い場所にある物も取ることができません。大きなお金を動かすこともないし、たくさんの人を動かすこともないでしょう。人々の中で低く見られることが多く、助けが必要な小さな存在です。

子供の、そうした特徴が当てはまる人物がいます。それはイエス・キリストです。イエスはすべての人の中で最も低い者となり、最も小さな者となられました。「このような子供の一人を受け入れる」とは、イエスのように私たちが低く見られる時、小さな者と見られる時、自分自身を受け入れる必要があります。低く見られた自分を受け入れるとき、それはイエスを受け入れることになるのです。

私たちは、いつでもふさわしい評価を当てにしています。本来よりも低く見られることには耐えられません。本来より低く見られることを「子供扱いされた」と言うことがあります。子供に失礼かも知れませんが、私たちは子供扱いされることに耐えられないのです。

しかしイエスは、最期の場面で誰よりも低く扱われました。そしてそれを甘んじて受け入れたのです。鞭で打たれ、茨の冠を被せられ、つばをかけられ、ののしられ、最も罪の重い人間と同じく十字架に磔にされました。

私たちは、たとえ「子供扱い」されたとしても、イエスの最期ほどの屈辱は味わわないでしょう。そうであるなら、受けた仕打ちを、子供扱いされたことを、受け入れてほしいのです。自分自身の中にある「子供扱いされたくない」という頑なな思いを捨てて、これも「このような子供の一人を受け入れることだ」と受けとめてほしいのです。

自分が歩んできたキャリアとかけ離れた仕事に回される人がいるかもしれません。これまでの働きが評価されず、立ち位置を一段階落とされる人がいるかもしれません。私のことを全く分かっていないと、怒りを覚えるかも知れません。

しかし、どれだけ子供扱いされようとも、評価を落とされようとも、神は私のことをよくご存知です。神は誰よりも私を正しく評価してくださる方です。イエスはすべてをご存知の父なる神に、十字架上で「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」（ルカ 23・46）と仰せになりました。

幼きイエスの聖テレジアをご存知でしょうか？カルメル会に16歳で

入会し、わずか８年の奉献生活で亡くなりました。もともと健康に恵まれていなかったので、修道院内では日記を付けることと、高齢の修道女の身の回りの世話、そうしたことを長上に命じられ、果たしていました。

しかし彼女が亡くなってから日記が公にされると、たぐいまれな聖なる生活を過ごしていたことが明らかになりました。そのため、教会は彼女を聖なる人、「聖人」と認定しました。

彼女の内面を満たしていた聖なる生活がもっと早くに知られていれば、たとえ病弱であっても、もっと崇高な仕事を長上から与えられても不思議ではありませんでした。しかし生前に、テレジアの聖性を見抜いた姉妹は誰一人いなかったのです。誰一人、気づかなかったのです。

幼きイエスのテレジアは、すべての人の中で最も低く、最も小さな者となり、同じ姿を取られたイエスを受け入れました。私たちも、置かれた場所でイエスを受け入れなければなりません。それも、最も低く、最も小さな者となられたイエスを受け入れます。それは全面的にイエスを受け入れますか、一部分ですかという大きな問いかけになります。

◆再び自分の死と復活を予告する

9:30 一行はそこを去って、ガリラヤを通って行った。しかし、イエスは人に気づかれるのを好まれなかった。

9:31 それは弟子たちに、「人の子は、人々の手に引き渡され、殺される。殺されて三日の後に復活する」と言っておられたからである。

9:32 弟子たちはこの言葉が分からなかったが、怖くて尋ねられなかった。

◆いちばん偉い者

9:33 一行はカファルナウムに来た。家に着いてから、イエスは弟子たちに、「途中で何を議論していたのか」とお尋ねになった。

9:34 彼らは黙っていた。途中でだれがいちばん偉いかと議論し合っていたからである。

9:35 イエスが座り、十二人を呼び寄せて言われた。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」

9:36 そして、一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせ、抱き上げて言われた。

9:37 「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」

主日の福音 2024/9/29(No.1317)

年間第 26 主日（マルコ 9:38-43,45,47-48）

多様性を認めて神の国が豊かになる

信徒の皆さんは、司祭の異動を通して次の経験をしたことがあるでしょう。「前の神父様はこうしていたけれども、今度の神父様は違う仕方をする。」ここで信徒の皆さんが偉いなぁと思うのは、以前のやり方と今度の神父様のやり方が違っていても、徐々に合わせてくれるという点です。

「前の神父様のやり方しか受け入れない」ではなく、「今度の神父様のやり方でも、教会を前に進めていこう」その精神が偉いなぁと思うのです。今週の福音朗読はまさにそうした体験と重なる出来事が起こっています。

「ヨハネがイエスに言った。『先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちに従わないので、やめさせようとしました。』」（9・38）当時、教会共同体があちこちで生まれてくる中で、「自分たちと違う」「これまでと違う」そういう違和感を覚えた共同体とぶつかっています。

しかしイエスの答えは違っていました。「やめさせてはならない。（中略）わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方なのである。」（9・39-40）違いを、認め合うことで、どんな集まりでも豊かになっていくのです。それは教会共同体でも全く同じです。

皆さんがすでに体験したことを一つ、例に挙げましょう。聖書愛読運動は、長崎教区で取り組んで 22 年になりますが、どの書物を、どのように読むのか、二年前と去年からの取り組みとは全く違うでしょう。「前までの取り組みと違うのでやめさせようとしました」と考えますか？決してそうは思わないでしょう。

むしろ、「こんな聖書愛読の仕方もあるんだなぁ」と、豊かさを味わうまたとない機会になっていると思います。主任司祭は小教区を三つ回っていますが、それぞれ、どの書物を読むか、どのように取り組むか、違いがあります。それは混乱をもたらすものではなく、確かに豊かさをもたらし、聖書に親しみを持つ機会となっているのです。

違いがあるところでは、時に摩擦を生むかも知れません。お互いに、「自分たちのやり方が絶対良い」とさえ言い出す人が現れるかも知れません。けれども、違うということに、少し窓を開いてもらえないでしょうか。自分と違う人に少し心を開くと、「どうすればお互いの良いところを活かせるか」考えるようになるでしょう。それは豊かさを生む鍵だと思うのです。

こちらに住んで、景色はさほど特別とは感じませんが、石垣は立派だなぁと感じることがあります。武家屋敷通りとか、立派ですよね。石垣を積み上げている石は、もちろん一つずつ、少しずつ違いがあります。違いを見極めながら、かつて職人たちが石を積み、立派な石垣に仕上げたのです。人工の石垣にはない美しさと強さが、それぞれ違う石を積み

上げた石垣の素晴らしさです。

　教会に集まる皆さんも、一人一人、違っています。もし違いを認めないなら、偏った教会家族になり、もろさを晒してしまうでしょう。違いを認め、活かし合うのは難しいことですが、最後に一つの家族にしてくださるのはイエスです。「わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方なのである」と仰ったイエスが、今日も、この教会を豊かにしてくれます。

◆逆らわない者は味方
9:38 ヨハネがイエスに言った。「先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちに従わないので、やめさせようとしました。」
9:39 イエスは言われた。「やめさせてはならない。わたしの名を使って奇跡を行い、そのすぐ後で、わたしの悪口は言えまい。
9:40 わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方なのである。
9:41 はっきり言っておく。キリストの弟子だという理由で、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる者は、必ずその報いを受ける。」
◆罪への誘惑
9:42 「わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がはるかによい。
9:43 もし片方の手があなたをつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両手がそろったまま地獄の消えない火の中に落ちるよりは、片手になっても命にあずかる方がよい。
9:45 もし片方の足があなたをつまずかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両足がそろったままで地獄に投げ込まれるよりは、片足になっても命にあずかる方がよい。
9:47 もし片方の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出しなさい。両方の目がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、一つの目になっても神の国に入る方がよい。
9:48 地獄では蛆が尽きることも、火が消えることもない。

主日の福音 2024/10/6(No.1318)

年間第 27 主日（マルコ 10:2-16）

神は結婚する男女に恵みも与えてくださる

下五島地区のスポーツ大会が無事開催されそうです。一時は台風でどうなることかと思いましたが、心配して祈ってくださった皆さんのおかげで開催にこぎ着けることが出来そうです。

地区長である私は「地区長賞」を準備するように依頼されていたので準備しましたが、地区長は出費のかさむ役回りですね。司祭団ソフトボール大会にも寸志を出しました。教区が「地区長手当て」を新設してくれたらなぁと本気で思います。

「あなたたちの心が頑固なので、このような掟をモーセは書いたのだ。」（10・5）ファリサイ派の人々は「モーセが離縁状を書いて離縁することを許しました」（10・4）と主張しましたが、モーセがこのような考えに至ったのは人間の頑固さに妥協したというより、人間の頑固さを告発するためだったとイエスは説明します。

ファリサイ派の人々は結婚を掟の立場からしか見ていません。結婚に神が込めてくださった意義や尊さを見ようとせず、結婚した人が掟に触れずに妻を離縁する抜け道までも議論していたのです。

イエスは神の思いである結婚の意義や尊さこそ大切にされるべきであると反論しました。イエスは旧約聖書の創世記を引用しながら、結婚が本来わたしたちに求めていることは何か、考えさせようとしています。わたしたちもイエスに導かれて結婚の意義や尊さを再確認しましょう。

イエスがファリサイ派の人々のために引用したのは創世記２章です。その中で神は「彼に合う助ける者を造ろう」（創２・20）とお考えになりました。一組の男性と女性が力を合わせて生きる者となるとなることについて「男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。」（同２・24）と宣言しました。この部分をイエスは引用します。

ここから読み取れるのは、結婚の意義と尊さは、男女のカップルが対等に向き合う者として創造されたのだということです。男性を支えるためだけに女性が与えられたわけではありません。二人は一体となって結婚生活のさまざまな場面を体験し、ときには難局を乗り越えていく。そこに結婚生活の意義と尊さがあるということです。

人が前に向かって歩いていくためには、さまざまな問題を分析し、決断し、行動する必要があります。たいていは一人で決めるわけですが、一人で決めることは危険な場合もあります。その際、「向き合って助けてくれる者」がいて、力をもらえるのはどんなに有難いことでしょう。すぐそばに、助ける者がいる。それが、結婚生活なのだと思います。

また人間の成長のためには、苦しみの道を避けては通れません。苦しみがどんな意味を持っているのか、なぜこのような苦しみを通らなければならないのか、自分一人では背負いきれないこともあるでしょう。苦しみの道を通って、人間として成長する。結婚した男女は、避けて通れない苦しみを、もはや二人ではなく一体となって、乗り越える力を互

いに与え合うのです。

もしかしたら、お互いへの興味や関心は次第に薄れていくかもしれません。毎日聞く話は同じように聞こえ、退屈かもしれません。また、年齢を重ねて次第に衰えていくことを互いに受け入れることは耐えられない、想像できないと思えるかもしれません。

けれども、結婚した二人は、神が結び合わせてくださっているのですから、神はたえず、必要な力と恵みを与えてくださいます。こうして結婚は、単に人間に求められている掟の一つにとどまらず、互いに成長し、互いの完成のために関わり合って生涯を全うする召し出しのです。

結婚を数ある掟の中の一つと見るファリサイ派の人々は、神が結婚に求めている心を忘れて形式主義に陥り、形式に触れなければよいといった抜け道にまで議論が及んでいきました。イエスは結婚を定めた神の思いに目を向けさせました。

結婚の意義や尊さを神が用意してくださった恵みなのだとあらためて気づけば、夫婦で担っていく苦しみさえも尊いものに変わります。神が与えてくださった恵みに感謝する一週間といたしましょう。

10:2 ファリサイ派の人々が近寄って、「夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか」と尋ねた。イエスを試そうとしたのである。
10:3 イエスは、「モーセはあなたたちに何と命じたか」と問い返された。
10:4 彼らは、「モーセは、離縁状を書いて離縁することを許しました」と言った。
10:5 イエスは言われた。「あなたたちの心が頑固なので、このような掟をモーセは書いたのだ。
10:6 しかし、天地創造の初めから、神は人を男と女とにお造りになった。
10:7 それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、
10:8 二人は一体となる。だから二人はもはや別々ではなく、一体である。
10:9 従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」
10:10 家に戻ってから、弟子たちがまたこのことについて尋ねた。
10:11 イエスは言われた。「妻を離縁して他の女を妻にする者は、妻に対して姦通の罪を犯すことになる。
10:12 夫を離縁して他の男を夫にする者も、姦通の罪を犯すことになる。」
10:13 イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。
10:14 しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。
10:15 はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」
10:16 そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。

年間第 28 主日(マルコ 10:17-30)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

主日の福音 2024/10/13(No.1319)

年間第 28 主日（マルコ 10:17-30）

あなたに欠けているものが一つある

10 月 10 日に、浦上教会でヤコブ山内豊神父様の葬儀ミサが行われ、葬儀ミサの説教をお願いされましたので思うところを話しました。「惜しんでわずかしか種を蒔かない者は、刈り入れもわずかで、惜しまず豊かに蒔く人は、刈り入れも豊かなのです。」（二コリ 9・6）という箇所を、コリントの信徒への手紙二から引用して、豊神父様は文字通り、「豊か」な生き方で司祭職をまっとうしました、そのように話しました。

27 年ご無沙汰していた浦上教会の説教台に上がって説教したのですが、不思議と福音書朗読の時も説教の時も落ち着いていました。長らく上がったことのない場所に上がれば、少しは緊張するかなと思っていたわけですが、その兆候さえありませんでした。落ち着き払っていました。

しかし、それが実は落とし穴だったかも知れません。念のため録画と録音をして持ち帰り、あとでチェックしているうちに、なんか奢りとかが見え隠れするなぁと思えたわけです。精一杯考えた内容なので誰にも恥じるところはありませんが、肝心の山内豊神父様には、「あんたのそういう所は、直さんといかんね」と言われている気がしました。

一つのことを長く続けていると、自分が歩いた時間・経験にあぐらをかいてしまって、自分が今どう映っているか見えなくなることがあります。一つの生き方を貫く中でも、同じことがあります。今週の福音朗読で登場した「金持ちの男」は、「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」（10・17）とイエス様に尋ね、イエス様は一つの答えを示しました。

それに対し金持ちの男は「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」（10・20）と答えます。皆さんは、この答えを純粋な答えと受け取ったでしょうか？わずかに、ドヤ顔しているように聞こえなかったでしょうか。今年はＢ年ですからマルコ福音書から朗読が取られていますが、関連する箇所はマタイ福音書にもあって、マタイでは「そういうことはみな守ってきました。まだ何か欠けているでしょうか。」（マタイ 19・20）と答えています。明らかにドヤ顔していますよね。

そこへイエスは付け加えるのです。冷たく突き放すのではなく、彼を見つめ、慈しんで言います。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」（10・21）

あっと驚く指示だったので、金持ちの男は「気を落とし、悲しみながら立ち去った」（10・22）となっています。この金持ちがその気になれば、全財産を売り払っても、また同じだけの財産を築くことは出来たでしょう。だから立ち去る必要は無かったはずですが、そこまでの信頼をイエスに持てなかったので、立ち去ってしまったのだと思います。

中田神父は、「行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい」このことばよりももっと注意すべきことばがあると思っていま

す。それは「あなたに欠けているものが一つある」ということばです。イエス様は、金持ちの男にだけでなく、私たちすべてに、「あなたに欠けているものが一つある」と声をかけることができるお方なのです。

今日、一人の大人の方が洗礼をお受けになります。洗礼名はマルコを選びました。今年はマルコ福音書を主に朗読していきます。できれば、これからマルコ福音書に親しみをもって読み続けてくだされればと願います。マルコ福音書は、洗礼を受けて間もない人々を導くために書かれた福音書と言われます。またいちばん短い福音書、簡潔に描かれた物語ですので、これからの信仰生活にぴったりだと思います。

ぜひマルコ福音書の中で語りかけるイエス様のことばによく心を開き、仮に「あなたに欠けているものが一つある」という声が聞こえたときも、その声に耳を澄まして、何が欠けているのか、考える人になってほしいです。洗礼を受ける心構えは出来たでしょうか。それではこれから洗礼の儀式に入りたいと思います。

年間第 29 主日(マルコ 10:35-45)

主日の福音 2024/10/20(No.1320)

年間第 29 主日（マルコ 10:35-45）

身代金を払ってもらって自由を味わっている

土曜日朝、ミサの当番を間違えました。四日間の司祭助祭黙想会を終えての翌日でしたが、当番表を見ずに聖家族修道院に出向き、ミサを始めたあと携帯電話が鳴りました。「あー、間違えたんだな」と気づきました。まもなく、助任司祭の車も聖家族修道院にやって来ました。

けれども私の車が置いてあるのを見て、間違って来ている主任司祭を可哀想に思ったのでしょう、福江教会に戻ってミサをしてくれました。久しぶりに、言い訳のきかない間違いをしました。

今週の朗読で私の目に留まった箇所は、最後のところの「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」（10・45）この箇所です。「身代金」はあまり身近な言葉ではありませんが、今、現役で仕事をしている人には無関係な言葉ではありません。

職場ではパソコンがどこででも使われています。ときおりそのパソコンに不審な画面が現れ、「おたくらのパソコンの中身をそっくり盗んだ。返してほしければ『身代金』を払え」と脅迫のメールが入るのです。日本の会社で身代金要求の脅迫メールが来て仕方なく要求に応じたケースで、平均的な身代金の額は 1 億 2300 万円だそうです。

イエスは「多くの人の身代金として自分の命を献げるために来た」と言っています。仮に金額が一億円だとして、私は二つのことを考えました。一つは、これまで何人の身代金のために自分の命を献げてくださったことか、ということです。今世界の人口は 81 億人と言われています。おそらく、100 億人分の身代金が支払われたのでしょう。イエス様の命は、100 億人の身代金に値する献げものだったのです。

もう一つ考えたのは、私のためにも、すでに一億円の身代金が支払われた、ということです。私はこれまでに 2 千万円分の現金しか見たことがありません。私のパソコンが乗っ取られ、「一億円用意しろ、でないとパソコンの中身をばらす」と言われ、すべてを現金化しても用意できる金額ではありません。そのような身代金として、もうすでに私のためにイエスの命が献げられている。これは驚くべきことだと思います。

身代金が支払われて多くの人が自由の身となりました。その自由を、あなたはどのように使うでしょうか。自分の自由のために使いますか？それも可能です。しかし中には、次のような自由のために、使うことも可能です。それは「多くの人が自由に生きられるお手伝いのために使う」ということです。

今日午後から、牢屋の窄殉教記念ミサが開催される予定でした。現地でのミサは天候悪化のために中止となりました。牢屋の窄で命を献げた人々は、自分の信仰の自由のために命を献げました。

そして同時に、日本でキリスト教を信じる多くの人の自由のために、命を献げたと言って良いでしょう。イエスの命という身代金で買い戻さ

れた自由を、自分のためだけでなく、多くの人の自由のために使ったのです。

私はこれを、司祭召命、奉献生活の召命にも結び付けて話すこともできると思います。司祭の召命・奉献生活の召命は、どちらかと言うと自分の自由のためではなく、多くの人の自由のために命を使う道です。

このような生き方を選ぶ人が十人に一人、いや百人に一人いれば、多くの人が自分の自由のために思い切って生きることができるのではないでしょうか。司祭や奉献生活者の生き方を選ぶ人は、多くの人の自由に奉仕する、仕える生き方。私はそう考えました。

イエス様がご自分の命という尊い身代金を払って、私たちは自由に生きるチャンスを与えられました。私たちに自由に生きるチャンスが与えられたのは、命を献げてくださったイエス・キリストのおかげですと、声を大にして語る人が、百人に一人くらいいてくれたら。世界宣教の日にあたり、そのような希望を持ちながら、ミサを続けたいと思います。

年間第 30 主日(マルコ 10:46-52)

主日の福音 2024/10/27(No.1321)

年間第 30 主日（マルコ 10:46-52）

あなたの人生にもイエスと出会う「エリコ」はあります

年間の主日も 30 週になりました。34 週目が「王であるキリスト（年間最後の週）」ですから、教会の暦「典礼暦」もいよいよ最終に近づいています。年間の週を終わると救い主の誕生を待ち望む「待降節」、新しい典礼暦です。

今週、盲人バルティマイのいやしの場面なのですが、説教をするほとんどの人が取り上げないであろう部分に目を留めてまとめてみました。それは出来事が起こった場所「エリコ」です。「イエスが弟子たちや大勢の群衆と一緒に、エリコを出て行こうとされたとき、ティマイの子で、バルティマイという盲人の物乞いが道端に座っていた。」（10・46）

新約聖書の中で、「エリコ」という場所が四回使われています。すべて興味深いです。（1）マタイ 20 章「二人の盲人をいやす」（2）マルコ 10 章「盲人バルティマイをいやす」（3）ルカ 10 章「善いサマリア人」（4）ルカ 19 章「徴税人ザアカイ」何か、気づいたでしょうか？

私はこう考えました。「エリコ」という場所は、「出会いの場所」なのではないか、ということです。マタイ福音書の二人の盲人はイエスに出会いました。今週のマルコ福音書のバルティマイもイエスに出会いました。ルカ福音書 10 章の「善いサマリア人」は、このたとえを通して律法の専門家がイエスに真の出会いを体験します。ルカ 19 章の徴税人ザアカイも、イエスに出会いました。

「エリコ」という場所が使われているのはこの四箇所で、ほかの使い方がされていません。四つを眺めていて中田神父は、「エリコは人がイエスと出会う場所なのかもしれない」と考えたのです。初めて出会った人、通りがかりに偶然出会った人、以前から会いたいと思っていてようやく機会を得た人、いろんな出会い方があるかも知れませんが、彼らはエリコで、イエスと真の出会いを果たし、人生が変わったのです。

しかしこの場所は、私たちにとって縁遠い場所です。日本から遠く離れたパレスチナの地、エルサレムの北東にある町ですが、位置関係を説明しても少しも身近には感じられないでしょう。私たちがすっかり「エリコ」という町に縛られてしまっているからです。

むしろ、新約聖書の中でイエスと真の出会いをする場所が四回も繰り返された。そのことに目を向けると、学びがあると思います。私たちの人生の中で、何度も繰り返してイエスと真の出会いをしている場所があるなら、そこがあなたにとっての「エリコ」なのではないでしょうか。

今週の物語に当てはめると、バルティマイは「先生、目が見えるようになりたいのです」（10・51）と願って、イエスが「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った」（10・52）とお答えになると盲人は「すぐ見えるようになった」ことになっています。

身体の目が見えるようになるだけでしたら、「見えるようになれ」とイエスが命じれば済むことです。しかしイエスはバルティマイの信仰

にまで踏み込んで出会ってくれました。私たちの信仰にまで深く踏み込んで出会ってくれた場所。そこは、バルティマイがイエスに出会った場所と同じく「エリコ」と呼んで良いのではないでしょうか。

ずっと教会のミサに通っていながら、退屈だ、早くミサを終わって出かけたい、そんなことばかり考えていた人がいるとします。しかしあるときから、「ミサに来るのが楽しくなった。説教を聞いて、見えなかったものが見えるようになった」そういう経験を何度も味わえたとしたら、この教会が「エリコ」であると、言えるのではないでしょうか。

私は、ゆるしの秘跡を受ける告白場が、皆さんとイエス様が深く出会っている場所だと考えています。告白場に留まる時間は本当に短い時間、３分とか５分です。しかしその短い時間の中で、告白をする人がいやしの恵みを受け、心を洗われ、再び力を得て帰って行くのを何度も見ます。皆さんにとっても告白場は、ゆるしを与えようとしておられるイエス様がより近く感じられる場所、緊張する場所ではないでしょうか。

実は私たちの生活の中に、イエスと真の出会いを果たす場所「エリコ」と呼べる場所があります。その場所をさまよって探し回る必要はありません。イエスは必ず、出会いたい場所であなたと出会おうと、待っておられるからです。

年間第 31 主日(マルコ 12:28b-34)

主日の福音 2024/11/3(No.1322)

年間第 31 主日（マルコ 12:28b-34）

理解したことを実行すれば神の国の住民になれる

「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」（12・28）ユダヤ人は守るべき掟が細かくなって、最終的には 613 もの掟を背負っていたと言われています。これでは、「背負いきれない重荷」（マタイ 23・4 参照）と受け取られてもしかたがありません。

掟は、人が、神の望む方向に生きていくためのものでなければなりません。決して、人を縛って、生きづらくするものではないのです。旧約の律法、ひいては現代の教会の掟は、人を守りますが、それは神の望む生き方ができるように守ってくれるものと考えるべきでしょう。

そうしてみたとき、イエスの時代の人々は、掟を喜ばしいもの、歓迎できるものと思えなくなっていたのでしょう。律法学者のイエスへの問いは、掟に窮屈になっていた様子がうかがえます。それに対してイエスは、第一の掟、第二の掟として、すっきりと整理して、示したのです。

あなたがたが神に喜ばれる生き方をするのに、第一の掟はこうである、第二の掟はこれである。この二つがあれば、どんな人でも神に喜ばれる生き方ができるはずだ。イエスはこのように、答えを示したのでしょう。

だんだん年齢を重ねてくると、一日の活動時間は短くなってくるし、できる量も少なくなってきます。一日に四つも五つも仕事をこなして平気な時代がありますが、それがだんだんと三つが精一杯、疲れないで仕事を続けるためには二つが理想的、そういう時期がやって来ます。

荷物を持つのも、かつては買い物袋をたくさん提げて歩くことができましたが、今は「持って二つ」になっているかも知れません。そこでイエスが示された第一の掟、第二の掟は意味深いと思うのです。私たちが生涯にわたって、神に喜ばれる生き方を続けていくために、二つの掟に整理して示してくださった。

どんなに歳を重ねても、少ない荷物しか持てなくなったとしても、背負っていけるように、第一の掟、第二の掟に整理して、示してくださったのではないでしょうか。もちろん能力や年齢に応じて、第一の掟にたくさん詰め込むことは可能です。第二の掟も幅広く実行可能です。

イエスは、すべての人が神の喜ぶ生き方を選べるように、掟をシンプルに示してくださいました。いわば、両手に握りしめられる掟を授かったのです。私たちは時々、「重荷になるものを子や孫の世代に残したくない」と考えがちです。どうでしょうか、イエスの考え方は、私たちの心配を取り除いてくれるのではないでしょうか。

一つ、気になる朗読箇所があります。「イエスは律法学者が適切な答えをしたのを見て、『あなたは、神の国から遠くない』と言われた。」（12・34）どうして「遠くないと」と言ったのでしょうか。中田神父は、「答えを示したのだから、ただ理解するだけで終わらず、それを生きていきなさい」と仰っているのだと思います。同じことは、私たちにも求められていることです。

年間第 32 主日(マルコ 12:38-44)

主日の福音 2024/11/10(No.1323)

年間第 32 主日（マルコ 12:38-44）

この人は自分の持っている物をすべて入れた

先週、イエス様の時代に掟は最終的に 674 あったと話しましたが、613 の間違いでした。あまりにも細かくなってしまった 613 の掟を、ある人が「無意味（613）」とバッサリ切ったのを、「虚しい（674）」と誤解していました。

今週の福音朗読後半は、やもめの献金についてでした。イエスは賽銭箱の向かいに座って、一人の貧しいやもめの献金に目を留めました。貧しい人だったから、またやもめだったから目を留めたのではないと思います。その人の心がけを見て、弟子たちにお手本として示したのです。

朗読の最後の部分は、少し説明が必要です。「皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れた」（12・44）実は、金持ちたちが何を入れたのか、わざと書いていないのです。「皆は有り余る中から入れた」何を入れたのかここには書かれていません。

これに対して、やもめが何を入れたか強調されて書かれています。「自分の持っている物をすべて、生活費を全部」です。何を入れたのか書かれていないのは、何も入れていないのに等しい献金だったからでしょう。ところがやもめが献げた物は「すべて」「全部」だったわけです。

ここに登場しているやもめは、まずは「神にすべてを委ねることのできる人」と言うことができます。神にすべてを委ねたのだから、神がすべてを計らってくださる。その絶対の信頼を持っている人です。

さてこの女性は、いったいどこに行けば見つかるのでしょうか。イエス様の時代にさかのぼらないと、出会えないでしょうか。それとも、私たちの身近にいるでしょうか。たとえばこのミサに参加している人々の中に、神にすべてを委ねることのできる人はいるでしょうか。

中田神父が「一人だけおられますよ」と言ったら、誰のことを思い浮かべるでしょうか。周りの人を見渡しますか？一人だけおられますと言ったのは、それはイエス・キリストのことです。祭壇を囲んでミサをささげていますが、祭壇の中心におられるイエス・キリストが、「神にすべてを委ねることのできる人」ではないでしょうか。

父なる神にすべてを委ねたのだから、父なる神がすべてを計らってくださる。それを完全に理解しているからこそイエスは、「自分の持っている物をすべて」祭壇の上に置くことができるのです。私たちはある程度のおささげはしています。しかしすべてを祭壇に置くわけではありません。それなのに私たちのおささげが尊いものに変わるのは、自分をすべて祭壇上でささげるイエスがおられるからです。

神学生時代に興味深い話を聞きました。小学生の子どもが、陶器の貯金箱を主任神父様のところに持ってきて、目の前で壊して中身をすべて取り出し、主任神父様にこう言ったそうです。「神父様、これでばあちゃんのためにミサをしてください。ばあちゃんは重い病気で入院して

います。大人の人のようにたくさんのお金はないけれども、持っているお金をすべてここに置くので、これでお願いします。」乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れた。ステキな話だと思いませんか？

　私たちが祭壇で囲んでいるのは、毎週見ているいつものパンとぶどう酒かもしれません。しかしこのパンとぶどう酒を用いて、イエスはご自分をすべてお与えになるのです。私たちはなかなかすべてを祭壇に置くことが出来ませんが、私たちのために、イエスはご自分のすべてを祭壇で献げてくださいます。私たちはそれを見ています。少なくとも毎週、ある人は毎日見ているのです。

　私たちが集まる中に、少なくとも一人、自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れてくださる方がおられます。私たちはそれを見て、その方に養われて生きています。イエスに倣って、私たちも人生の中で、ある時期教会のために「賽銭箱に入れている人の中で、だれよりもたくさん入れた」という時期があっても良いのではないでしょうか。時間や、都合や、祈りに参加すること、家庭で祈ること。人生のあるひとときは、「誰よりもたくさん入れた」そういう時期があっても良いと思います。

　11 月は死者の月です。先祖のために、墓に行って祈ってください。先祖のため、すべての死者のため、「誰よりもたくさん入れた」そういう月にしてください。福江教会では 10 日午後 3 時から墓地ミサです。

年間第 33 主日(マルコ 13:24-32)

主日の福音 2024/11/17(No.1324)

年間第 33 主日（マルコ 13:24-32）

わたしの言葉は決して滅びない

　最近二度にわたって司式司祭の椅子に猫がいたずらして、「けっこう毛だらけ」になってました。平日の朝ミサで、集会祈願を唱えて椅子に座ろうとしたら毛だらけの椅子に気づいて、「あ、こりゃ座れないわ」と諦めて別の椅子を取りに行きました。

　この猫のいたずらを見て、私はイエス様が律法学者を非難する場面を思い出しました。「律法学者に気をつけなさい。彼らは長い衣をまとって歩き回りたがり、また、広場で挨拶されること、会堂では上席、宴会では上座に座ることを好む。」（ルカ 20・46）猫の中にも上席、上座を好む奴がいるのだなと出来事を振り返っていたのです。

　聖書を読めば、あらゆる場面に、当てはまる聖書の箇所があるように思います。新約聖書は２千年も前に書かれたのに、目の前で起こっている出来事、現代社会が置かれている状況を的確に捉えます。猫のいたずらさえ、聖書のどこかが頭に浮かぶのです。イエスのことばが現代にあって生きていると、この一つをとっても分かるのではないでしょうか。

　今週の福音朗読は、人の子が来るまでに起こるであろう出来事を並べています。ただ、ここにあるような天変地異は、私たちに何かもたらしてくれるでしょうか。太陽が暗くなって、星が落ちて、天体が揺り動かされる。それを、いつか起こることとして警戒していても、何か生活に良い影響を与えるでしょうか。

　それらはいつか起こるのでしょうが、それを恐れて生きていても何も良いものは生み出さないように思うのです。今週の朗読で、捉えなければならない箇所は、別のところにあると思います。

　「いちじくの木の教え」の部分で、「夏の近づいたことが分かる」「人の子が戸口に近づいていると悟りなさい」とありますが、人は皆、何かを分かり、何かを悟れる能力を与えられています。何を分かり、何を悟ればよいのか。それは、「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」（13・31）中田神父はこのことばだと考えています。

　たとえ、天変地異が起こることを知り、悟ったとしても、それで人が何かを掴むということはないでしょう。しかし、「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」このことばを知り、悟るなら、今を生きる私たちに必要な知恵を得ることができるのではないでしょうか。

　「人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。」（13・26）その時がやって来ますが、それは破滅の日ではなく

て、救いの日です。なぜなら、私たちは日々イエス様のことばにとどまって、養われて生きているからです。「人の子は天使たちを遣わし（中略）彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める。」これも救いの訪れです。「わたしの言葉は決して滅びない」と固く信じてその日を迎えるからです。

この世界に、確かなものがいよいよ見いだせなくなっている中で、イエス様の言葉は決して滅びない確かなものです。これからも私たちはみことばに耳を傾け、それを拠り所にして日々を過ごしましょう。私たちはイエスの再臨を喜んで迎えることが出来ます。イエスは、ご自分の約束が確かであることを証明するためにおいでになるからです。

王であるキリスト(ヨハネ 18:33b-37)

主日の福音 2024/11/24(No.1325)

王であるキリスト（ヨハネ 18:33b-37）

王であるキリストに直接触れるとうとい日

初聖体クラスの四人は、長い準備を終わって、今日御聖体をいただきます。とても楽しみですね。主任神父様は、皆さんが今日までしてきた長い準備を、立派だなぁと思っています。いろいろ、担当のシスターに教えてもらったでしょう。今から聞いてみたいと思います。

もしかしたら習ったことと違うことを聞くかも知れません。けれども、今から聞くのは主任神父様が知りたいことです。まず一つ目の質問です。御聖体をいただく前は、食べたり飲んだりするのを早めに終わらなければなりません。いつまでに食べたり飲んだりをやめますか？

主任神父様は、ミサをささげて、御聖体を準備します。御聖体を準備するので、早くから食べたり飲んだりするのをやめなければなりません。神父様は、９時のミサをするためには、ミサの１時間前、８時に食べたり飲んだりをやめる必要があります。

ミサの中で御聖体を準備する神父様はミサが始まる１時間前から食べたり飲んだりをやめます。では、答えを聞きましょう。皆さんは、御聖体をいただくどれくらい前に食べたり飲んだりをやめますか？二つのうちどちらかに手を挙げてください。①神父様と全く同じ、ミサが始まる１時間前に飲食をやめる。②御聖体をいただく１時間前に飲食をやめる。どちらだと思いますか？正解、したことにしましょう。

御聖体をいただく皆さんは、御聖体拝領の１時間前に食べたり飲んだりするのをやめます。神父様は、皆さんがいただく御聖体を準備するミサをささげるので、皆さんのために大切な働きをするので、皆さんよりもっと早く、ミサが始まる１時間前に食べたり飲んだりをやめます。

もう一つの質問です。いちばん前に座っている四人のお友だちは、土曜日の昼に、初めての秘跡を受けましたね。何でしたか？そうです。初告解です。御聖体をいただく１時間前に食べたり飲んだりをやめるだけでなくて、きれいな心、罪のない心で御聖体をいただくためです。御聖体をいただくために、きれいな心も準備する必要があるので、告解（ゆるしの秘跡）を受けました。

じつは神父様たちも、きれいな心でミサをささげ、御聖体を準備する必要があるので、ゆるしの秘跡を受けます。いつもいつも受けているわけではないけれども、そのかわりに、告解場に毎週、毎日座ります。それは、主任神父様の考えは、食べたり飲んだりをミサの１時間前にやめるのとあわせて、きれいな心でミサをささげ、御聖体を準備するためです。毎週、毎日告解場に座って、清い心を準備しています。

二つ、質問しました。御聖体をいただく前に、いつ食べたり飲んだりをやめますか？御聖体をいただくために、食べたり飲んだりとは別のもう一つの準備は何ですか？この二つです。皆さんは御聖体をいただく１時間前に食べたり飲んだりをやめ、そしてきれいな心を準備して御聖体をいただきます。神父様は、もっと厳しく、もっと徹底して、ミサの

始まる１時間前に食べたり飲んだりをやめて、ミサのたびにきれいな心を準備しています。

どうしてここまで、準備するのでしょうか？お友だちの誕生会に呼ばれたとき、ケーキを食べる１時間前に食べたり飲んだりをやめて出かけるでしょうか？誕生会に行くために、きれいな心を準備したことがあるでしょうか。そんな準備はしませんよね。それなのに、御聖体をいただくためには、立派な準備をしています。なぜでしょうか？

それは、王であるキリストに、触れるからです。私のために、食べ物になってくださったとうといイエス様を手に取るからです。私たちのために、ご自分の身体をちぎって食べさせてくださる、とうといイエス様を手に取って、口に運ぶからです。ケーキやチョコレートではなく、教会でしかいただくことのできない、とうといお恵みだからです。

近くのお店には置いていません。日曜日、このミサでしか御聖体はいただけません。ほかのどれとも違う、とうといものなのです。とうといから、触れるために１時間前から食べたり飲んだりをやめて、きれいな心を準備して、そうしていただきます。

今日のミサは「イエス様は私たちの王です」ということを祝っています。私たちは王様に触れます。王様を手に受けて、食べさせてもらいます。ほかでは味わえないとうとい恵みです。ミサに来て、御聖体をいただくときはいつでも、とうといイエス様をいただくことを思い出してください。

「皆、これを取って食べなさい。」（マタイ 26・26）今日は四人のお友だちが王であるイエス様を手に取っていただく日、とうとい日です。これからも日曜日はぜひミサに来て、とうといイエス様に触れる体験を積み重ねてください。王であるイエス様は、皆さんが来てくれるのをいつも楽しみに待っています。

王であるキリスト(ヨハネ 18:33b-37)

主日の福音 2024/12/1(No.1326)

待降節第１主日（ルカ 21:25-28,34-36）

どのようなイエスの到来でも身を起こして頭を上げる

教会のカレンダー「典礼暦」では待降節第１主日が一年の始まりです。初聖体を受けたお友だちにとって、今週から本当に新しい始まりです。今日、祭壇の横に、今まで置いてなかった物が置かれています。気づいたでしょうか。「アドベントクラウン」とか、「アドベントリース」とか呼ばれている飾りです。

このリースにローソクが四本立てられていて、これから一週ごとにローソクの火を増やしていきます。いつまでこのリースを飾って、ローソクを灯していくでしょうか。イエス様の誕生「クリスマス」までです。イエス様をお迎えする準備が始まりましたよ。今週はその一週目ですよ、二週目ですよと、私たちに準備をさせる助けになります。

初聖体組のお友だちは、初聖体を受けるまで、ミサの中で何が行われているのか、ほとんど分からなかったかもしれません。けれども御聖体をいただくようになった皆さんを、これからはイエス様が育ててくださり、ミサの中で何が起こっているのかがよく分かるように導きます。お恵みを受ける前と違って、御聖体のお恵みがどんどん皆さんを育ててくれます。

ミサをしている神父様の着ている服を見てください。何色ですか？紫色ですね。神父様たちは、典礼の季節によって、その日の祝日によって、祭服の色を変えてミサをしています。きっと今までは、祭服の色とか何も気にしてなかったし、見てなかったでしょう。

けれども御聖体をいただいたその時から、イエス様に育てられて、祭服の色に気づけるようになると思います。いつか、お父さんお母さんに、「今日神父様はどうして紫の服を着ていたの？今日はどうして白だったの？」と尋ねるようになるでしょう。お父さんお母さんはその時は「あとで神父様に聞いてごらん」と促してください。

今日神父様が読んだ福音の中から、次の言葉を選びました。「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ。」（21・27-28）

「雲に乗ってくる」これがいつかは分かりませんが、イエス様が大いなる力と栄光を帯びておられる姿は、これから何回も見ることができます。イエス様の誕生もそうです。ヘロデはイエス様の誕生に不安になるほどでした。クリスマスのあとは、学者たちが黄金とか、びっくりするような貴重な贈り物をして礼拝するご公現を迎えます。

その次はイエス様が洗礼者ヨハネから洗礼を受けて、天が開いて聖霊が鳩のような姿でイエス様に留まります。また四月、新学期を迎えるとイエス様の復活をお祝いします。こうしてたくさんの「大いなる力と栄光を帯びておられる姿」を、これから皆さんは見ることになります。

この「人の子が大いなる力と栄光を帯びて」おられる姿を見るとき

は、私たちにとっては喜びの時、解放の時です。それはイエス様を信じて、イエス様に養われてその時を迎えるからです。イエス様を知らない人、信じない人は、「人の子が大いなる力と栄光を帯びて」来ると聞いたら、怖いと思うかも知れません。小さな子どもは、お父さんお母さん以外の人を、知らない人だから怖がります。それと同じです。恐ろしくて、お父さんお母さんのうしろに隠れてしまうでしょう。

　私たちは違います。力と栄光を帯びてやって来るイエス様は、私たちのために御聖体になってくださったイエス様と同じだからです。いつも私たちを養い、育ててくださる方です。喜んで私たちを迎えてくださり、優しく導いてくださる方です。力と栄光は、私たちを怯えさせるものではなく、私たちの喜びのためです。

　ですから私たちは、イエス様がおいでになることを「身を起こして頭を上げ」ながら待ちます。イエス様がおいでになるときはいつでも、喜んで迎えましょう。「いつも目を覚まして、イエス様がおいでになるのを待って祈っていました」と言えるように、イエス様を待ちましょう。最初は、イエス様の誕生を待ちます。

待降節第 2 主日(ルカ 3:1-6)

主日の福音 2024/12/8(No.1327)

待降節第 2 主日 (ルカ 3:1-6)

行動的な待降節に

福岡の大神学院に入学して、待降節に天神の街中で「クリスマス募金」のお手伝いをしました。生まれて初めて、街頭に立ちました。先輩たちと、行き交う大勢の人に向けて「ご協力をお願いします。クリスマス街頭募金にご協力をお願いします」と叫びました。

40 年ほど前のあの体験が、司祭になってからいくつかの教会で街頭募金に立つ時に役に立ちました。子どもたちが恥ずかしくて声を出せない中、私がお手本を見せて、次第に子どもたちも元気な声で手伝ってくれました。

荒れ野で叫んでいるわけではありませんが、通り過ぎる大勢の人は無関心です。一方、私たちを眺める人の目は疑いの目でした。胡散臭い慈善活動と思ってジロジロ見ていたのだと思います。「募金はどこに送ったのか。これまでの送金実績を見せろ」と言う人もいました。

もちろんそんな中にも善意の人もいて、「あなたたちが毎年この時期に募金に立っているのを見ていました。悪い人たちではなさそうなので、今回から募金します」と言って協力してくれる人もいました。

徐々に、街頭募金も声かけのコツが分かってきて、上級生になると協力してくれそうな人とそうでない人とが目を見て分かるようになり、協力してくれそうな人の心に届けと願いながら「ご協力をお願いいたします」と叫んでいました。

「荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』」（3・4）これは具体的には、自分のためには全く得することが無いけれども、これからおいでになる救い主の示す生き方「道」に、各自の生き方「道」を合わせなさいと叫ぶことです。

100 人のうち 99 人が無視して通り過ぎていく中で、「あなたの生き方を、もうすぐおいでになる救い主の生き方に合わせましょうと叫び続けるようなものです。洗礼者ヨハネは、あえてその先頭に立ちました。人が誰も暮らしていない荒れ野で、1000 人に 1 人気づくか気づかないかの中で、耳を傾ける人をじっと待って悔い改めを呼びかけたのです。

待降節は、もちろんですが救い主の誕生を待つ季節です。しかし自分が待つだけの、受け身の姿勢では足りないかも知れません。救い主とその方の生き方をあなたにもあなたにも、自分の生き方としてみませんか。そのように積極的に働きかける待降節にする。これが待降節に期待されている行動的な過ごし方です。

今年、大人の洗礼の恵みがこの教会に与えられました。結婚にあたり、配偶者の信仰生活も共に歩みたいと考えてのことです。ここにお集まりの皆さんの中にも、すぐそばに「信仰生活も共に歩めたらいいな」と願っている人がいるのではないでしょうか。そのような人は、あなたの積極的な働きかけを受け入れてくれるかも知れません。「信仰も同じだったらいいな」という一言を、待っているかも知れません。

当然、「主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ」と叫ぶ人が増えれば、耳にする人も増えることになります。私たちも、洗礼者ヨハネに倣って、「私は救い主の生き方に自分の生き方を合わせます。あなたも、生き方を救い主に合わせてみませんか」と、積極的に動いてみましょう。

救い主を待つ謙遜な生活、ゆるしの秘跡による心の準備、そばにいる人が同じ信仰を歩むような働きかけ。その中で信仰を共にするための働きは、自分のためには得することは無いかもしれませんが、もし聞き入れてくれたら、天の国の住人を一人得たことになります。

待降節第 3 主日(ルカ 3:10-18)

主日の福音 2024/12/15(No.1328)

待降節第３主日(ルカ 3:10-18)

わたしよりもすぐれた方が来られる

「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。」（3・16）洗礼者ヨハネは、自分のあとに来られる方が確かに優れていることを理解しています。

私たちはしかし、ただいまの朗読を読み終わっても、あとから来られるイエス様のどこが洗礼者ヨハネより優れているか分かっていません。おいでになる方がすべての預言者より優れている方であることを確認して、待降節の準備を前に進めましょう。

洗礼者ヨハネは、いろんな境遇にある人々が「わたしたちはどうすればよいのですか」と求める声に、ごく普通の答えを返しました。尋ねた人々が拍子抜けするような勧めでした。「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」（3・11）

徴税人や兵士にも、ごく当たり前の勧めを与えました。徴税人は集めた金をローマに納め、「罪人」と思われていましたし、兵士は命令が下ればどんな命令にも従う冷酷な人です。よほど厳しく追及されるのかと思っていたら、置かれた生活の中で実行できる勧めでした。

イエスも、特別な人でなければできないような勧めをしたりはしませんでした。「求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない。」（マタイ 5・42）では何が、洗礼者ヨハネより優れていて、イエス様を待つべきなのでしょうか。

洗礼者ヨハネよりイエスが優れている点。それは、イエスの働きが、常に聖霊と共にあったという点です。今週の朗読でも、洗礼者ヨハネはイエスのことを次のように証言しています。「その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。」（3・16）

宣教活動の中でも聖霊が共にいてくださることを示しています。「言うべきことは、聖霊がそのときに教えてくださる。」（ルカ 12・12）これは弟子たちに語っただけでなく、イエスご自身の働きの中でも聖霊が共にいてくださったということです。

どんなに難しいことを求めたとしても、イエスは聖霊によって心の中をすべてご存知の上で語りかけます。洗礼者ヨハネが「わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない」（3・16）と言ったのも当然のことです。

一人の金持ちが天の国に入るためにどうすれば良いかを尋ねたときがそうでした。「イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。『あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。』」（マルコ 10・21）金持ちは掟を隅々まで守ってきたので、自信満々だったのですが、心の中を見透かされました。

次の箇所も、イエスが聖霊と共におられることを証明しています。

「イエスは、彼らが心の中で考えていることを、御自分の霊の力ですぐに知って言われた。「なぜ、そんな考えを心に抱くのか。」（マルコ 2・8）洗礼者ヨハネは、霊の力で見ることはできませんでしたが、イエスはご自分の霊の力で私たちの心の中を見抜きます。

　これからお迎えする幼子イエスは、私たちの心の中にもとどまってくださいます。私たちはふさわしい準備が必要です。私たちの心を、霊の力ですべて見渡しておられる方のお部屋として提供できる準備ができているでしょうか。洗礼者ヨハネの勧めを参考にして、私たちの準備を急ぎましょう。

待降節第 4 主日(ルカ 1:39-45)

主日の福音 2024/12/22(No.1329)

待降節第 4 主日(ルカ 1:39-45)

マリアは出かけて、急いで、ユダの町に行った

「そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。そして、ザカリアの家に入ってエリサベトに挨拶した。」（1・39-40）マリアの行動から、ご降誕直前の準備を学び取りましょう。

エリサベトとマリアの立場はずいぶん違います。エリサベトからすると、マリアは身分の高い人と映っています。言葉遣いが明らかにそうです。「あなたは女の中で祝福された方です。体内のお子さまも祝福されています。」（1・42）対等な話し方をしていません。

訪ねていく人のほうが身分は高い。私は 10 月に亡くなられた山内豊神父様を訪ねた中村大司教様のことを思い出しました。山内豊神父様は司祭団の一人ですが、中村大司教様は長崎大司教区の教区長です。明らかに大司教様の方が身分は高いと思います。

普通、挨拶に来る人と挨拶を受ける人とでは、挨拶を受ける人の方が身分が上です。この世の中では身分の高い人のところに挨拶に行くものです。しかしマリアは、この世の慣例を飛び越えて、エリサベトに挨拶に行きました。しかも、この朗読のあとに続く「マリアの賛歌」の中で、みずからを「身分の低い者」としたのです。「身分の低い、この主のはしためにも、目を留めてくださったからです。」（1・48）

中村大司教様もそうでした。自分を、低い者と受けとめ、危篤の状態にあった神父様を訪ねました。もし意識があるうちに訪ねていたなら、山内豊神父様はきっとエリサベトと同じことを大司教様に言ったでしょう。「私たちの大司教様が私の所に来てくださるとは、どういうわけでしょう。」（1・43）

マリア様自身も、聖霊の働きで子を宿している身でしたが、真っ先に考えたのは先に身重になったエリサベトを訪ねることでした。これにはどういう意味があるのでしょうか。真っ先に、自分を低くすることを考えた。そういうことではないでしょうか。

マリア様は、救い主を宿していることを知ったあと、身分にふさわしい生活を手に入れようとしたのではありません。真っ先に考えたのは、自分を「身分の低い、この主のはしため」とすることを考えたのです。救いの計画の、最高の協力者となるためです。

ご降誕を直前に控え、私たちはお手本としてマリアに倣うべきです。私たちも、クリスマス直前の準備のために、自分を低くすることを考えるべきです。私の生活の中で、自分を低くすることが可能でしょうか。訪ねてきてもらうのではなく、みずから訪ねていく人になれるでしょうか。

すでにマリア様は、私たちに模範を示してくださいました。真っ先に、自分を低くすることを目指しました。では私たちは、ご降誕直前に真っ先に思い浮かぶのは何でしょうか。浮かんだものが、自分を低くすること以外であれば、自分を低くする努力に順番を譲るべきです。する

と、マリアと同じ姿で御子を迎えることができます。

　事実、救い主はマリアによってお生まれになりました。自分に起こる世界でただ一つの出来事を受け取るために、まず自分を低くする女性が、救いの計画の最大の協力者となったのです。

　あなたも現代にあって、救いの計画の協力者になりたいですか？そうであるなら、まず自分を低くすること。ここから始めることにしましょう。神はいつの時代にも、自分を低くする者を顧みてくださり、協力者として用いてくださるのです。

主の降誕(夜半)(ルカ 2:1-14)

主日の福音 2024/12/24(No.1330)

主の降誕（夜半）(ルカ 2:1-14)

布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子

主の降誕おめでとうございます。私たちは待降節の準備を終えて、今や喜びの時を迎えました。心から待ち望んだ人、何かの工夫をして待降節を過ごした人には喜びはひとしおでしょう。何も準備をせず、ただ日々を過ごすだけで迎えた人には分からない喜びがあると思います。

今年のクリスマスに、主の天使の次の言葉を取り上げたいと思います。「あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」（2・12）示された幼子は、人の目にどのように映るでしょうか。

人口登録に来た人がもしこの家畜小屋の光景を見たなら、泊まる場所がなくて飼い葉桶に幼子を寝かせている親子は、どのように映ったでしょうか。社会から見捨てられ、隠れるようにして暮らす親子と映ったかも知れません。

のちにやって来る羊飼いたちは、主の天使から出来事の説明を受けていたので、幼子は「大きな喜び」「救い主の誕生」と映りますが、解き明かしがなければ、「自分たちと変わらない、野宿をしながら生活している親子」としか映らなかったでしょう。

朗読箇所が教えてくれるのは、神の側からの解き明かしがなければ、この幼子を救い主と認めることはできないということです。ですからまず私たちは、飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子の前に、静かに留まる必要があります。人間のどんな知恵も知識も、この幼子が救い主、主メシアであることを見抜くことができないからです。

私たちが、人間の知恵に頼らず幼子イエスの前に自分を置くなら、神はこの幼子がどなたであるかを解き明かしてくださいます。今からでも遅くないので、幼子のために私の心に広い場所を用意しましょう。そうすれば、神の方から照らし導いてくださいます。

私たちの心に、幼子イエスを迎えるなら、イエスが人として成長し、神と人とに愛されていったように、私たちも人として成長し、神と人とに愛される歩みを共にできるはずです。私たちが受け取ったのは「神秘」でもあります。神秘は、人間には解き明かしのできないものです。ところが神は「神秘」そのものですから、人間に解き明かしをすることもおできになります。

今年もたくさんの出来事がありました。他人には与えられたのに、自分にはそれが与えられなかったとか、なぜこのことが他人にではなく自分に起こったのか。そういうこともあったでしょう。誰も説明出来ないことを説明してくださるのは神です。私たちが幼子イエスを迎え入れ、イエスと共に歩むなら、解き明かすことのできなかった出来事の意味を、説明してくださるでしょう。

今年、中田神父には「布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子」が、「これから一年間、わたしと一緒に希望の巡礼者となってほしい」と語りかけているように映りました。

主の降誕(日中)(ヨハネ 1:1-18)

主日の福音 2024/12/25(No.1331)

主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

民のところに来た「言」を私のどこに置きますか

「万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。」（1・3）昨晩の夜半のミサで、あなたの目にはこの幼子イエスはどのように映っていますかと尋ねました。あなたが言い表した信仰告白と、「万物は言によって成った」というヨハネの信仰告白は、うまく一致するでしょうか。

福音書が語るイエス様の一生の中で、お生まれになったイエス様を待ち構えているのは、穏やかな日々ではありません。羊飼いや占星術の学者の訪問も束の間、ヘロデから命を狙われます。それで幼子を連れて母マリアと養父ヨセフはエジプトに向けて出発しなければなりません。

エジプトへの旅と、エジプトからの帰還の旅も、きっと苦難の連続だったでしょう。教皇フランシスコは、聖家族のエジプト避難を「世界難民移住移動者」になぞらえて説明されました。エジプト避難の旅は、安全の保障もない、危険な旅だったのです。

さて教皇フランシスコは、12 月 29 日から来年の 12 月 28 日までを「聖年」と定め、私たちに「希望の巡礼者」となるよう促しています。幼子イエスを抱きかかえて旅立った聖家族は、イエス様と共に旅をしたので、最初の「希望の巡礼者」でした。私たちも、イエス様とこれからの聖年を過ごしていくなら、「希望の巡礼者」になれると考えます。

では、どのようにしてイエス様と共に聖年を過ごしていけば良いのでしょうか。今日の福音朗読、ヨハネ福音書の第 1 章が教えてくれています。それは、万物をお造りになった「言（ことば）」であるイエス・キリストを心に収めて日々を過ごすということです。

「言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。」（1・11-12）神のことばであるイエス・キリストを受け入れた人は、希望のうちに日々を過ごすことができます。たとえそれが、見た目には不安な日々であっても、希望を失うことはないのです。なぜならイエス・キリストを、日々心に収めて過ごすからです。

砲弾が飛び交う戦場にあっても幼子は母の胸で休みます。同時に母親は、幼子がそこに居ることで安心できます。私たちがミサに来て、聖書の朗読からみことばを持ち帰り、それを保って一週間を過ごすなら、私たちはどんな困難の中でも希望があります。どこかに巡礼することはなくても、イエスと共にいる生活は「希望の巡礼者」なのです。

みことばとして留まってくださるイエス様が「希望の源」であるなら、あなたはその「希望の源」を、心のどこに置きますか。不安な日々、危険と隣り合わせの仕事、余裕がなくいつも仕事に追いかけられる。こうした中で、神のことばであるイエスを、あなたは心のどこに置きますか。もう一度馬小屋のイエス様を眺めながら、自分の答えを出しましょう。

聖家族(ルカ 2:41-52)

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

主日の福音 2024/12/29(No.1332)

聖家族(ルカ 2:41-52)

イエス様はあなたの家族になっていますか

中田神父は毎週祭壇の上と、説教している自分の様子だけ収録して、YouTube にアップしております。聖堂全体の様子を収録すると、侍者の顔も映るし、皆さんの顔も聖体拝領の時に映って、「見られたくない」と誰かが拒めば、何年も続いてきた宣教活動の一つが止まってしまうので今の形を続けております。

それでもご降誕の夜半のミサは、記録として残すために聖堂二階から撮影しておりました。録画を後で確認したら微笑ましい出来事が収められていました。ミサの最後、閉祭の歌「もろびとこぞりて」の流れる中、侍者と助祭と司祭が馬小屋のイエス様を礼拝して帰る場面に、二階でミサに参加していた幼い子供の声をビデオカメラが拾っていました。

拾っていた声は、お母さんにこう尋ねている声でした。「イエスさま生まれた？」私はその子にこう答えたいです。「二階ではなく、馬小屋に行って確かめてごらん」と。もしその子が、両親と一緒に馬小屋を訪ねて確かめたなら、その家族は幼子を受け入れたのですから、聖家族に見倣う家族となるでしょう。もし確かめずに、二階からそのまま玄関を出て家に帰るなら、聖家族の姿はその家族から遠いでしょう。

聖家族の祝日に、主任司祭が伝えたいことは夜半ミサの微笑ましい出来事で皆さんにお伝えしました。私たちの家族にもイエス様が生まれて、イエス様を囲んで生活していく。そうすることで私たちは聖家族の模範を学びながら成長することができます。

もしかしたら、こう考えている人がいるかもしれません。「私たちは自分たちの生活を考えるのが精一杯で、信仰生活を豊かにする余裕など、現実の生活では望めません」と。ここで、過越祭のときエルサレムに残ったイエス様がマリアとヨセフに言った言葉を思い出す必要があります。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」（2・49）

「わたしが自分の父の家にいるのは当たり前です」と、少年イエスは言っています。今年の夜半のミサは、ずいぶん参加者が増えていました。クリスマスしかミサに来ない人が、きっとたくさん来ていたのでしょう。しかしなぜ、クリスマスしか来ないのでしょうか。幼子イエスを自分たちの生活にも迎え入れて、聖家族の模範を仰ぎたいからではないでしょうか。イエスが私たちの家にいるのは当たり前だと、知っているから夜半のミサに来るのではないでしょうか。それとも知らなかったのですか？

無意識であれ、私たちの教会には生活の中にイエスがおいでになることを喜んでいる家族がたくさんいるようです。イエスがいてくださることには安堵しながら、イエスの照らし導きは必要ありませんというのは虫が良すぎます。イエスはこの世にお生まれになり、とどまり続ける場所を必要としておられます。共に暮らす家を探しておられます。

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。

そうであれば私たちの中に、イエス様が話を聞いたり質問したりできる場所を用意してあげましょう。自分のことで精一杯と考えている人は、自分中心に生活のすべてを埋め尽くしてしまおうと思い込んでいるわけです。果たして自分の満足で生活は埋め尽くせるのでしょうか。むしろ神が共におられて満足する生活こそ、全てが満たされる生活なのです。自分の満足は、どれだけ追い求めても限度がなく、満たされないからです。

聖家族の姿は、家族のあり方をもう一度考えさせてくれます。あなたの努力だけで、家族を満たそうとするのですか、聖家族の姿を模範に、神が共にいる生活で満たされたいですか。馬小屋飾りが置かれているのはあと二週間です。それまでに、各自の答えを出しましょう。

神の母聖マリア(ルカ 2:16-21)